

UFO

GAP-JAPAN NEWSLETTER



UFOと宇宙哲学の専門誌

コンタクティー

contactee

月には濃密な**大気**と強い**引力**がある

AUTUMN

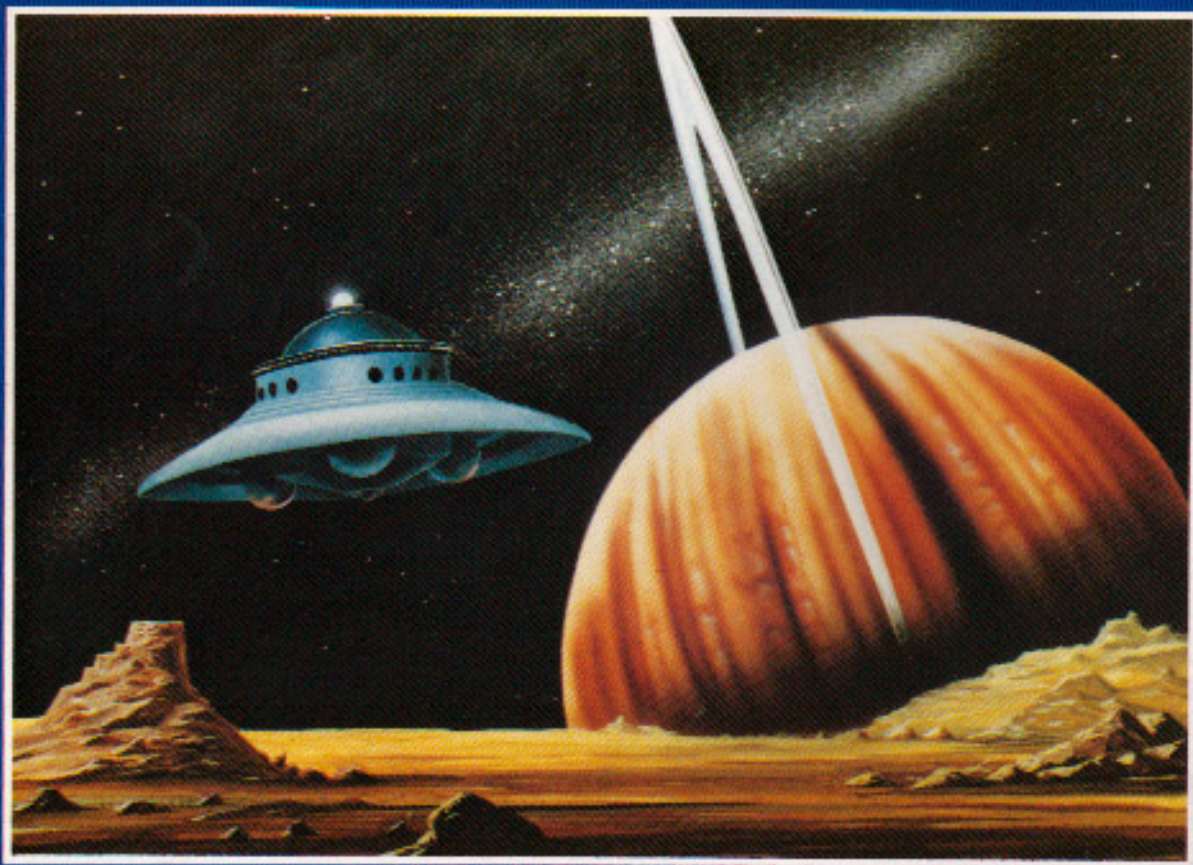
1984

超低空で接近した**アダムスキー型円盤!**
山腹に着陸した**巨大な円盤!?**

86

アダムスキー型円盤、超低空で出現!

テレパシーと透視 (2)

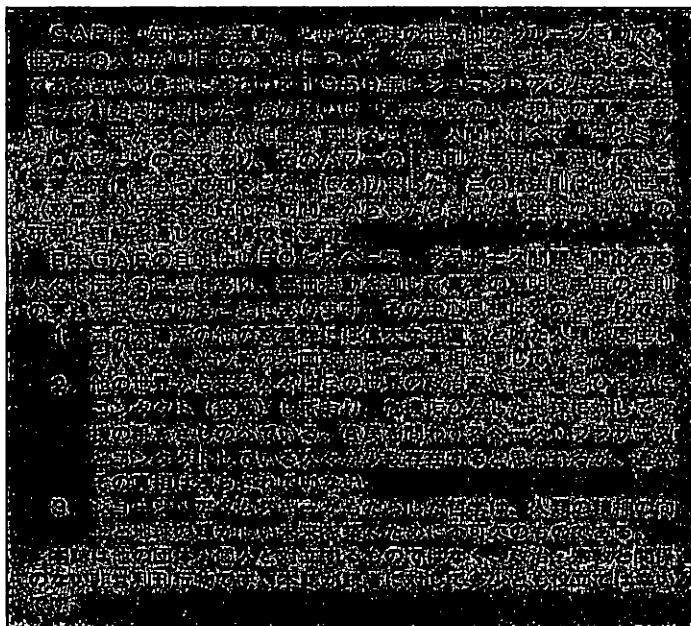


UFO contactee 第86号目次

〈巻頭言〉 何が真実か	1
月には濃密な大気と強い引力がある	—— ウィリアム・L. プライアン 2
超低空で接近したアダムスキー型円盤!	—— 遠藤昭則 14
山腹に着陸した巨大な円盤!?	—— 榎水 南 18
アダムスキー型円盤、超低空で出現!	—— 榎水 正 22
テレパシーと透視(2)	—— 久保田八郎 28
〈読者の声〉 コズミック・ポスト	32
〈予告〉 UFO写真展	34
〈報告〉 静岡支部大会	35
" 群馬支部大会 / 仙台・山形合同支部大会	36
" 沖縄支部特別月例会	37
〈予告〉 59年度総会と地方支部大会—その3—	38
〈広告〉 アダムスキー全集 / 84年度第2次「エルサレム 宇宙考古学の旅」	39
日本GAP全国月例研究会案内	40



GAPとは



■表紙イラストは土星の衛星から見た土星の想像図。日本GAP札幌支部会員・勝又英明氏画。

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
全記事・写真共他の印刷物への無断転載を禁じます。

本号はUFO目撃特集号とした。いずれの記事も真実そのままを伝えており、飛行機や流星その他の物の誤認ではない。特に底部に三個の球型着陸装置が見えたという二篇の内容は驚くべき事実の報告である。なぜならこれはアダムスキーが一九五〇年代初めに発表した、いわゆるアダムスキー型円盤といわれる金星のスカウトシップ（小型機）の形状そのものに関するレポートであるからだ。

これらからみてもアダムスキー撮影の円盤や母船類の写真はまぎれもない真実の物体を示すものであつて、模型を利用したトリック写真でないことがわかる。三十年後の今日も同じタイプのUFOが出現し続けているのである。

アダムスキーの円盤写真が発表された当時、賛否両論にわかれて世界のUFO研究界ですさまじい論争が展開したことは編者の記憶に新しい。さまざまの珍説奇説が飛び交うなかで、一つ鮮明に憶えているのは、アダムスキーは善良な人間だけれども、米軍部にだまされたというのがある。つまり、アメリカの沙漠地帯に巨大なセツトを組んで、この中に円盤や母船の真物大の模型を置き、本物の宇宙船に乗せられたような錯覚を起こさせられたという説である。このバカげた説はまもなく立ち消えになつたけれども、このこととは逆に米空軍やNASAあたりの一部首脳部による一般大衆にたいする擾乱工作の存在を暗示することになつた。つまりUFOなるものは存在しないと大衆に思い込ませ、太陽系内の地球以外の惑星

には人間が存在しないことが真実であるかのように信じ込ませて、大衆に錯覚を起こさせて地球のカラの中にとじ込めようとする工作である。これはまふまふと成功したかのように見えた。惑星探査機やアポロ計画による月探検の結果、アダムスキーの体験記の内容が真実だとは証明されなかつたという印象を結果的にうまく与えたからである。

たしかに大衆のほとんどは地球以外の惑星に人間が存在するとは夢想もしないし、UFOを信ずる人も、これは他の太陽系から来るものと思うようになつた。UFOは四次元世界から出て来て、地球

〈巻頭言〉 何が真実か



の大気圏内に入つてから物質化して可視的になるのだと説く人もある。

他の太陽系から来るという説はあながち否定できないが、地球の上空で見られるほとんどのUFOは、われわれの太陽系内の惑星から来た物体である。これは金属製の宇宙船であつて、不可視な盤体ではない。またこの乗員も生きた肉体をもつ人間であり、幽霊ではない。

アダムスキーを偽善者だと宣伝するコンタクティーがいるそうだが、この者は絶対に本物のコンタクティー（異星人と接触した人）ではない。なぜなら本物の高貴な異星人は、地球人の混乱を防ぐた

めに、コンタクティーにむかつて、他のコンタクティーを非難するようなことは言わせないからである。あれはインチキだ、これはイカサマだと名指しで平気で口にする自称コンタクティーがいれば、その者自身をニセモノとみて差支えない。また真実の高貴な異星人は、コンタクトに關連して宗教団体を作ることを絶対に認めない。彼らスペース・ビーブルは、自分たちを一種の神仏のように崇敬され、礼拝の対象になることを好まないのも、もし異星人に対して宗教団体を作る人があれば、それはスペース・ビーブルから無視されるはずである。

高貴なスペース・ビーブルは「私たちを、あなた方の隣近所の人と同じように扱つて下さい」と言っている。宇宙の法則を理解して私たちの想像を絶した進化をとげているからこそそのような謙虚さがにじみ出るのであろう。スペース・ビーブルの偉大さがわかる話である。だからスペース・ビーブルを神様扱いにして宗教団体を作る人があれば、その人は真実のスペース・ビーブルの援助を受けてはいないとみて差支えない。

これまでにアダムスキーの体験記を参考にしたり作り事のUFO同乗体験記類がずいぶん出されてきた。ひどいものになるとアダムスキーの体験記にヒントを得て、まことしやかなUFO同乗記か異星人とのコンタクト物語をでつちあげた上、逆にアダムスキーをインチキと攻撃したのがある。こんなのは人間のカスカ虫ケラに等しいものだろう。

いったい何が真実で、何が間違つてい

るかは、コンタクトストーリーに含まれているモラルをみればわかる、というのは故・徳川夢声老の言葉である。夢声老はアダムスキーの体験記に感られた高度な哲学に心酔していた。「この哲学でアダムスキーの真実性がわかりますよ」と熱心に語っていた。偽作のコンタクトストーリーにはこのような宇宙的哲学の展開が見られない。そして心霊的な異次元の物事に執着したりする。さらに変幻自在、消滅自由な宇宙人が描かれることが多い。こうした鬼面人を驚かすようなストーリーにまどわされてはならない。

別な惑星から来た高貴な人々はわれわれと全く同じ肉体を持ち、同じような容姿で体格も異ならない。そして同じような服装をして地球人の氏名を名乗って働いているから、人々は全く気づかない。このスペース・ビーブルはごく少数の特殊な地球人以外に正体を洩らすことはない。これは地球人の乱暴者を警戒するためである。すごいテレパシーの能力をもっているため、無法者が危害を加えようとしてもだめだろう。

この人々は、官民をとわず宇宙的な活動を続けるグループをひそかに援助しているし、その他科学機関や医療機関などで働いて、地球人の科学の発展に寄与している。また大戦争発生防止にもひそかに活躍しているという。たとえば一九六二年のキューバ危機で米ソの全面核戦争が発生しかけたとき、裏面でこれを防いだのはスペース・ビーブルだといわれている。この人たちが地球上で公然と姿を現せるのはいつのことだろう。

月面で行われた
アポロ飛行士たちの
驚くべき芝居！

MOON SURVIVAL'S A MENTAL BATTLE 月には濃密な大気と強い引力がある

「月には濃密な大気と強い引力がある」

第6章

宇宙開発以前の 月の大気に関する説

オーソドックスな科学は、月は全く大気のない世界だと主張してやまなかつた。そのおもな理由は、月の六分の一という弱い引力では多量の大気を保つことは不可能だということにあった。実質的な大気存在を示す徴候が現れても、ほとんどのオーソドックスな科学者に無視された。彼らはかねてから弱い引力しかないことを確信していたからである。しかし月には強い引力があるという証拠は常に出てきたのだ。この章の目的は大気がないという月に存在する諸条件の

明確な概念を読者に与えることにある。あとで重要な大気存在の証拠が出てくるときに隠蔽の範囲を明らかにするつもりである。

真空ならばホコリはたたない

月面に存在すると考えられる諸条件に関する分析は、一九六九年にUSニュース・アンド・ワールド・レポートの記者たちが書いた「月面のアメリカ」の中で次のように述べてある。

「かりに月が過去において大気の成分をつくり出したとしても、月の引力が弱すぎるので、地上に生命をもたらす酸素、窒素その他のガス類は宇宙空間に逃げてしまうだろう。大気がなければ月の表面には水もないだろう。

人間が月の表面から空をながめれば、全宇宙を全くの不毛の空間と決め込んでしまうかもしれない。星々は夜も昼も見えるけれども、それをまたたくように見せかける空気が存在しないために、全然またたかないのである。星々のあいだの広大な宇宙空間は、まっ暗闇なのだ。月から見れば太陽は耐えられないほど強烈に輝く球体のように見えるが、そのまわりの空は真夜中のようにまっ暗である」

月面の真空状態も、地球上よりもはるかに異なった具合で月面にホコリを舞い

上がらせるだろう。こうした実験の要約として、フランクリン・M・フランレー著「月の探険」で述べられた情報から引用してみよう。

米マサチューセッツ州ケンブリッジのスミソニアン天文台のフレッド・ホイップルは、ホコリを通過して分離させるガス類がなければ、ホコリの微粒子は互にくっつき合ってしまうはずだと主張している。その結果、ホイップルとその支持者たちは、月面のホコリは非常に強く固まってしまうので、人間とその乗物を支えることの可能な地殻が存在するだろうと主張している。

このことを確証するための実験が、ノースアメリカン航空会社のドゥエイン・ポウエンによって行われた。鋼製の球がこまかいホコリ状の微粒子を入れた容器

の中に放たれて、すぐに沈んだ。この球を擬似真空内の同じ条件下で落としてみると、球は表面で止まった。ホコリ微粒子から成る表皮がひどく固まっていたために、球を支えるに足る半固形状態ができたのである。

一九七一年に出された著書「宇宙の開拓地」の中で、ヴェルナー・フォン・ブラウンでさえも右の理論に同調していたらしい。彼や多くの人々は、月面でホコリがひどく散乱することはあり得ないと考え続けていたと述べている。

フォン・ブラウンによると、簡単な実験の結果、月面のような真空内でのホコリは固まってしまい、隣接したホコリの粒子は互いに溶けて軽石のような物質になってしまふという。この情報からみても、擬似真空中にホコリは存在し得ないことは明らかである。月が地球の表面引力の六分の一の引力しかもたないとすれば、大気を保ち得ないだろうし、表面はまず固まったドロのように固くなるだろう。

大気がなければどうなるか

もう一つ、月に関する古い考え方に、風化や浸食作用のシルシはないというのがある。その理由として、風化や浸食は基本的には雨や風のような大気現象の結果であるからだというわけだ。真空中では雲、雨、風などは存在し得ない。その結果、大方の意見としては、月には丸味を帯びた山はほとんどなく、ギザギザのつがった土地があるだけだということに

なっていた。もし浸食や風化現象が見られたとすれば、それは火山活動、隕石の落下、温度の変化、太陽風などのせいだということになる。太陽風は太陽からの水素とヘリウムガスの超音速流動であり、これは太陽系内を絶えず吹きまわっている。

月面に水は存在しないだろうともいう水があるとしても昼間の暑気でそれを蒸発させるし、引力が弱いので水蒸気が空中へ逃げるのを防ぐことができないから

だ。空気と水がなければ、地表の色の変化は火山活動や隕石落下で起こるだけだろう。また天候や植物がなければ季節ごとの色の変化も起こりようはない。

月の一日は地球の一日よりも二十八倍長い。したがって太陽が月の日の出から日没まで月の上空をまわるには、地球の一日を二十四時間として、十四日間を要する。月の夜も地球の夜よりも二十八倍長く、これは地球の十四日間に相当する。大気がなくて、しかも地球よりも二十八倍も長い昼夜のサイクルをもつのであれば、月の毎日の温度はカ氏五〇〇度以上のさまざまな温度になるだろう。長い月の一日は地表を高温にし、大気がないのだから熱が急速に逃げることもない。地表から熱を運び去る空気がないからだ。夜間はこれと逆の状態になる。地熱は大気がある場合よりもっと急速に空中へ放散してしまい、長い夜のために温度は極端に低下してしまう。

一方、地球の大気は夜間に地熱が逃げのを防ぎ、昼間に急上昇するのを防い

でいるのである。

月面では昼間でさえも影の部分と日光に照らされた部分とのあいだに温度の大きな差がある。これは影の部分の地熱は急速に逃げるけれども、日照部分の熱はそうでないからだ。この現象は地球でも高地の空気の薄い所で認められる。

光の拡散も起こらないはず

影と日照部分との温度差は他の問題をもひき起こす。日光にさらされない物質は、低い温度のためにほとんど抵抗なしにもろくなつて崩れる。一方、高温下の日光にさらされた物体をすぐに手にとることはできない。日光に部分的にさらされた物体のみが、日照部分と日陰の部分との温度差により、極端に破壊的な熱の圧力を受けるのである。だから月面に着陸した宇宙船や科学測定装置などは、適当に保護してないとこうした問題をひき起こすだろう。もし宇宙飛行士が一カ所にあまりに長くいると、体の片側は煮られてしまい、他の側は凍りついてしまうことになる。宇宙服を着ないで日光にさらされながら岩の上か月面車の座席に座っていたら、フライにされるだろう。

大気がなければ光の拡散は起こらない。影の部分は他の場所から来る反射された光によって照らされるにすぎない。こうした他の光源がなければ、影の部分にある物体は、完全ではないにしてもほとんど見えなくなる。

太陽を写真に撮れば凹形が鮮明に浮き出て、暗黒は太陽のコロナにまで及ぶだ

ろう。また太陽のまわりのハロ(後光)も見られない。大気による拡散(光を散らすこと)も屈折(光を曲げる)も起こらないからだ。月面の日没や日の出現象も、大気中の拡散や屈折が存在しないので、起こらない。空気中のホコリや、ホコリを支える大気がなければ、光の拡散は発生しないのである。

光の屈折

大気がなければ月の上空で隕石が燃えるのも見られない。加うるに星々も月によって掩蔽されるように見えぬ。星々は月または他の惑星によって食になるときに掩蔽される。もし惑星が大気をもつならば、その惑星の表面に近い星々は光の屈折作用により、かすんで赤味を帯びるようになる。そして他の星々と置き替えられるように見えるが、その惑星の凹形の縁によって実際に覆われたあととちよつとのあいだは目に見える。この屈折すなわち光の曲がりによって大気がない場合よりもやや早目に惑星の反対側に星が現れるように見えるのである。日食のあいだに太陽は月の大気を透して輝く(月に大気があるとすれば、このために月のまわりに光の屈折によるハロが生ずるのである)。

ホコリで悩むはずはない

月へ行つた宇宙飛行士たちはホコリで悩むことはなかったはずである。ホコリは真空中には存在しないからだ。彼らが

何とかしてホコリを作り出して、真空中でそれを服に塗りつけたとすれば、ほとんど取れなくなるだろう。ホコリは二カワのようにくっつくからだ。

大気がなければ、油のさしてない可動部分をもつ通常の機械類は、機能がとまるだろう。通常、機械の表面に接している空気分子の層は、その表面が互いに接触するときにくっつき合うのを防ぐ傾向がある。したがって大気がなければあらゆる表面はひどく粘着するだろう。

月には大気が存在する

月に強い引力が存在すると示唆すれば、これは古くからある月の真空説にとつてとんでもないことだろう。月の強力な引力が大気の存在を意味するのは、月から絶えず放たれる蒸発性物質やガス類が引力から逃がれ得ないからである。月は、地表の空気の密度が基本的に不変の状態にあるような平衡状態にまもなく達するだろう。大気の圧力も地球と同様に高きでまきまらう。読者は実質的な大気が存在する証拠は強い引力が存在する証拠でもあることを考えるべきである。一つの主張にたいする証明は他の主張をも証明するのだ。

月の実質的な大気は、雲、天候、浸食、水、植物、動物などが存在するかもしれないことを意味している。しかし月の長い昼夜や他の事実により、月面の諸条件は地球と同じではあり得ない。

次章では月の真空説を批判し、これが古くさい六分の一引力説と同じほどに価

値のないことを示すつもりである。NASA (米航空宇宙局) の隠蔽事の驚くほど多くの秘密漏洩によって、月が地球に似た大気を持つという莫大な証拠を提供

第7章

月の大気に関する信じられないほどの発見事

アポロ計画を実施中に月が地球に似た大気を持つことを示す多くの徴候があったが、テレビの解説者やリポーターたちはこの徴候を無視し、月には空気はないという古くさい考え方に固執しているように思われた。そこで真空説をやり込めるような証拠を出して、前章で述べた古くさい考え方を証拠に照らして調べてみよう。

ホコリがあれば大気もある

ホコリは真空中には存在し得ないという。しかし読者は宇宙飛行士が月の地表

している。しかしNASAから出た証拠に加えて他にも多くの情報源がある。これらをかなり詳細に調べることしよう。

でホコリの中を歩くのを(テレビで)見た記憶があるだろう。宇宙飛行士のニール・阿姆斯特朗が初めて月に降り立つ直前に、彼は地表をほとんどパウダーのように見えるこまかい砂だと述べた。一度地表に着くや、阿姆斯特朗は地表がこまかい粉末みたいだと首つて、最初の観察を確証した。そして自分のつま先で粉をすくい上げたところ、それが粉末状の炭みたいにかカトやブーツの面にきれいな層をなすくつついた様子も述べた。またほんのわずか前進して、粉末状の地表に自分の足跡を見ることができたと言っている。

そこでオーソドックスな科学者はこのホコリが存在することを認めてはいるけれども、月に実質的な空気があることは否定し続けている。しかし大気は存在しなければならぬ。なぜならホコリは真空中に存在できないからだ。月の大気は密度を決定されるのを待っているのだ。

月面で舞い上がるホコリ

アポロ11号は月面の低地である静かの海に着陸した。もし大気が存在するとすればその密度は低地の方が他のどこよりも大になる。

アポロ12号も低地の嵐の海に着陸したので、この間大気存在を示す徴候が期待された。実際、着陸後まもなくコンラッドはニール・阿姆斯特朗がいた所よりももっとホコリっぽい場所にいると思ったと述べている。

アポロ17号もホコリっぽい条件に遭遇した。読者はアポロ17号の月面車の後輪からオンドリの羽のようなホコリが舞い上がっている写真を覚えておられるだろう。このホコリは月面車のうしろで広がっているばかりでなく、あたりを舞い、飛行士たちの体に雨のように降りそいだのである。

アポロ11号の太陽風計測装置をすえつけた写真が本書(原書)の写真5に出ている。これは長さ一・二メートル、幅三十センチの非常に薄いアルミニウム箔のシートで、支柱からまっすぐに垂らしたものである。これは太陽風の分子を受けとめて、分析用に地球へ送り返すように



▲アポロ11号の乗員。左よりマイケル・コリンズ、ニール・阿姆斯特朗、エドウィン・オルリン

作られている。これと同じ実験がアポロ12号でも行われた。この実験については下に述べるアポロ12号の事故はルイスの書いた記事から要約したものである。

奇怪なアルミシートのふくらみ

その日早く飛行士たちが二度目の船外活動に出る前に、ピーンが着陸船の窓から奇妙な光景に気づいて首をひねった。

宇宙飛行士二人が最初の船外活動を終えて着陸船に入ったときは、太陽風をとらえるアルミ箔シートはまっすぐに垂れていた。ところがそのシートが柱のまわりで風を受けた帆のように見えるのだ。前方へふくらんで、両側がうしろへ曲がっている。ピーンは管制センターの連絡員にこのことを伝えた。すると連絡員は、本当の太陽風じゃないかと答える。からかつてはいけなやとピーンが言う。今度は連絡員が二者択一の解釈を出した。つまり、表側が裏側よりも熱で膨張したのではないかというのが一つ。裏側は熱を放射するので、熱の相違により表側が熱いのではないかともいう。連絡員が言うには、この考え方に同調している人が管制センターにも大勢いるという。そこでピーンは、まるで風が吹いているかのようにシートが柱のまわりをおおっているように見ると、しつこく答えた。

二人の宇宙飛行士が二度目の船外活動で着陸船を離れてから、連絡員がピーンに、太陽風シートが柱のまわりでふくらんでいるところを写真に撮るようにコンラッドへ伝えろと言う。

そこでコンラッドが写真を撮影する準備をしていると、別な驚くべき事が発生した。アルミ箔はもう柱のまわりでふくらんではいないのだ。コンラッドはピーンにむかって、ふくらんでいるように見えたのは着陸船の内部から見た光学的な錯覚だったにちがいないと伝えた。そこでピーンはこの観察についてヒューストンへ報告したのである。

太陽風が原因ではない

この出来事の分析はいまや明快である。大気が存在しないとすれば、月面では太陽風は実在するので測定可能と考えられていた。この真空状態こそ科学者がこの実験を最初に考えた理由となるものだ。

太陽風の基本的な構成分子は、秒速一千キロまでの速度で進行する水素とヘリウムであると考えられている。しかし太陽風はきわめて小規模なので、その密度は太陽活動が静かなときに一立方センチ中に一個ないし三十個の水素原子を含んでおり、この数が変動するにすぎない。いま太陽風が一立方センチ中に四個の原子を含んでいるとすれば、一平方センチあたり10ダインの衝撃圧を生じることになる(訳注)ダインは力の単位。質量一グラムの物体に作用して一秒につき一センチの加速度を生じさせる力の量)。いま活動している太陽に十倍の圧力があるとしても、その衝撃圧力は一平方インチあたりコンマ以下〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇三四ポンドとなる。この圧力は特別に作られた観測装置がなければ測

定はできない。地球の海拔ゼロの位置における通常の気圧は、一平方インチあたり一四・七ポンドである。ほとんど感じないほどの時速一マイル(一・六キロ)の地球の微風は、一平方インチあたりコンマ以下〇〇〇〇一八ポンドの圧力を及ぼす。そして窓の日よけをほとんど動かすことはない。しかしこれは太陽風の五百二十億倍の強さなのだ。

これでわかるのは、月面の太陽風はアルミ箔シートを曲げさせた原因ではないということだ。地上の管制センターが本当の太陽風のアイデアを示唆した後、ピーンは管制センターが冗談を言っているものと思い、そのような言葉を返した。

ピーンは明らかに太陽風が原因ではないことを知っていたのである。管制センターも明らかにこのことを知っていたのだが、この事実が洩れるのを防ごうとしたのかも知れない。

そのあと太陽風シートが不思議にもまっすぐになったとき、管制センターはまっすぐな解釈をして反対したのである。

本物の風が吹いた!

管制センターはシートの表側が裏側よりも広がったのだらうと言った。もちろんこれは太陽光を受けた物体に起こることだが、他の証拠によってこの解釈はくずれるのである。

まず第一に、シートは何の影響も受けることなく長時間太陽光をあびてセットされていたのだ。飛行士たちはこの装置で作業をしていたから、最初の船外活

動で曲がったシートに気づいたはずである。ひとたび曲がったならば、取りおろすまでは曲がったままでいるだらう。この月旅行の頃、太陽は月の空をほとんど動かない。したがって最初にシートを曲げた原因は、ほとんど同じ状態であるはずだ。

管制センターの連絡員が熱による膨張説をと考えた後、他の職員からも賛成意見を得たと述べた。明らかに彼らはこのように言えば大衆や他の科学者が受け入れられる解釈になると考えたのだらう。ピーンはシートが風をはらんで柱のまわりでふくらんでいるように見えたとき答えている。ピーンのこの発言の意味は、はつきりしている。彼は柱のまわりでシートをふくらませたのは、大気による本物の風であって、太陽風ではないことを確信していたらしい。太陽風説がすでに管制センターや彼自身によって否定されたあとで、彼が風を受けているみたいだとしつこく言ったのは、うっかり真相を洩らした言葉なのだ。ピーンは管制センターによる解釈を無視したらしい。そして大気が存在する証拠を目のあたりに見て果然となったのだらう。

月面で風ではためいた国旗

熱による膨張説にたいする決定的な打撃は、コンラッドが曲がったシートを撮影に行ったときに起こった。シートは短時間で不思議にもまっすぐになったのだ。前にも説明したように、これは真空状態のもとでは起こらない。光学的な錯覚だ

という発言は、のっけから持ち出ししてはならない物事に関する会話をやめさせようとしたのだろう。ひとたびネコが袋から出たからには、管制センターも宇宙飛行士たちもできるだけ機密漏洩を防ぐ必要があったのだろう。ビーンは訓練を受けた宇宙飛行士であるから、光学的な錯覚にだまされることはまずあるまい。

月の大気が太陽風観測シートを動かすことができたとすれば、かなり濃密でなければならぬ。アポロ計画のある着陸時に、宇宙飛行士が蹴り上げた砂ポコリが空間にただよう傾向がみられた。これは濃密な大気存在を示すものである。加うるに、初期のアポロ計画のある着陸時には、アメリカの国旗がはためくのが見えた。最初のアポロ飛行のときには、旗をきちんとつるすために旗の上部に水平の支持棒がつけてあった。このために時折、旗が軽い風ではためいたのである。

筆者(ウィリアム・ブライアン)はアポロ十四号の国旗掲揚式を示す映画を入手している。このフィルムを仔細に分析してみると、飛行士たちが旗に手を触れず、接近もしないのに、旗がはためいたり揺れたりしているのがわかる。

掲揚式の終わりに、一人の飛行士が旗から離れるにつれて旗は前後に揺れ始めた。そこでこれ以上大気風の存在を示すような場面は隠してしまえばかりに、二人の飛行士はムービーカメラで旗の場面を写すのをやめてしまった。旗の近くにいた宇宙飛行士がカメラの方へ走り始めてカメラの方へ行くとともに、他の飛行士がレンズの前で片腕を上げたのであ

る。だがこの動作は遅すぎて、証拠を隠すことはできなかった。

筆者は、月の大気存在を疑う人たちにたいして、自分の目でこのフィルムを見よと言いたい。そして月の濃密な大気存在説以外に別な筋のおつた説があるならば、それでもつて説明せよと言いたい。このゆるぎない証拠物件が大衆の手に入るというのは驚くべきことである。最後まで抵抗する懐疑論者ですら、このフィルムを見たなら納得するだろう。このアポロ14号のフィルムは、一九八〇年にカリフォルニア州ハリウッドにあるムービー・ニューズリール社から取り寄せたものである。

糊づけした旗を掲げる

アポロ16号では、すでに公開された揺れる旗について大衆の考え方をさらさせようという見えすいた試みがなされた。今度はいつもゆがんだ形を保つように、固く糊づけした旗が用いられたのである。これは空気のない世界で旗がはためいているように見せようとして処置がなされたのであって、あるテレビ放送でその特殊な点が強調されていた。しかし疑いもなくこの真の目的は、以前に旗が揺れたものだから、微風にも動かないようにしたのである。

光が拡散する月の大気

光の拡散を示す写真による証拠は、濃密な月の大気が存在することを示す最上

の証拠物件の一つである。アポロ14号が撮った月の地表、月着陸船、人力運搬車のタイヤの跡などは、本書(原書)の写真6に出てくる。これには全地面を横切る光のスジや地平線などが見えている。太陽から来る光の拡散はきわめて強いので、空のほとんどは照らされている。

第六章で、真空中では太陽光は極端に明るいけれども、そのまわりの空は完全な暗黒だという説明を読者は思い出されるだろう。

写真7は、背後にアペニン山脈がひかえたハドレーデルタ地帯の斜面に立つアポロ15号の飛行士スコットの写真である。写真8はアポロ16号の飛行士デュークが、ある深いクレイターの縁でサンプルを採集している光景で、背後には月面車が見える。

これらの写真に見える空は非常に明るくて、月の大気を通じて光の拡散すらあることを意味している。明らかに写真による証拠は、月の真空説を裏づけしないのだ。それは濃密な大気存在する証拠を与えているのである。

NASAは月面写真を修正していた!

NASAの隠蔽を暴露する別な写真が「ライフ」誌一九六九年十二月十二日号の表紙に出ている。アポロ12号の飛行士ビーンが月面に装置をセットしている写真だ。これは写真9に出ている。

月面にいる他の宇宙飛行士の写真類はこのハロ現象を示していないので、ここ

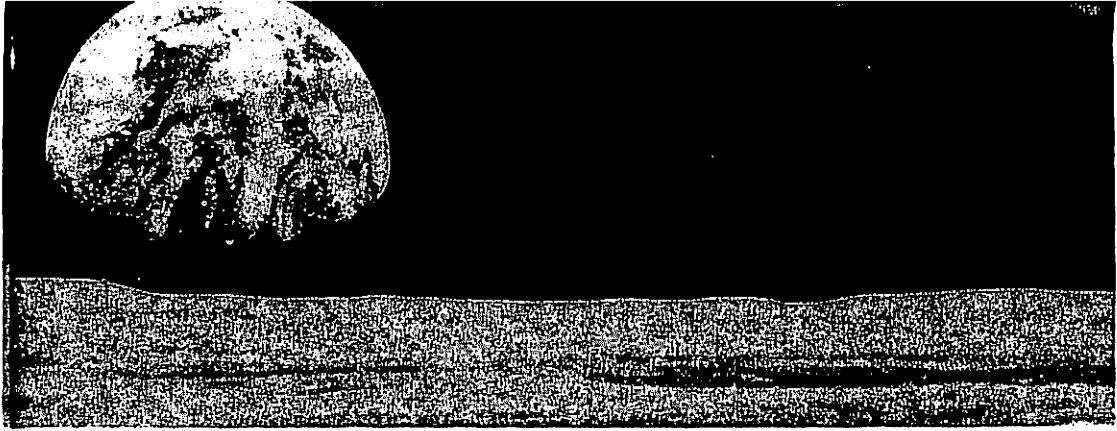
には唯一の納得のゆく結論が出ていると思われる。

すなわち大気存在の視覚的証拠をNASAは抹殺しようとして、少数の写真を除くすべての写真の空を黒く塗りつぶした。修正を施したのである。ビーンのまわりに見えるハロ現象は、バックの空を黒く修正するの失敗した拙劣な技術の結果なのだ。この月の光現象は写真中で非常にはつきり見えているので、他の写真でも現れるはずだったが、そうではない。他の文筆家のなかには、これは宇宙飛行士のオーラか、または月の真空中で目に見えるようになる電波エネルギーの放射ではないかと推測したものもある。それが矛盾なしに現れるものならば、この考え方にはメリットがあるかもしれないが、他の写真類を考えてみれば、まじめに取り上げるわけにはゆかない。

なぜかといえば、意味深長なことだが、NASAはそれが発生した理由の納得のゆく説明を大衆に全然与えていないからだ。NASAはそれを飛行士の宇宙服から出た見かけ上の反射のせいだと言ったにすぎない。

しかしこれでは意味をなさない。なぜなら、見かけ上の反射ならば飛行士のまわりの空間の物体からもそれが発生するはずであって、そうすればその現象の説明になる。

真空中ではカメラは写真中の各位地から直線状で進行する光子(訳注)電磁放射エネルギーの盘子)をとらえるにすぎない。したがって真空中ならばビーンは地平線上の空間のまっ黒な空で囲まれている



▲アポロ宇宙飛行士が月面から撮影した地球の写真。空の部分はまっ黒に塗りつぶした跡があり、月の地平線は不自然にシャープになっている。

たはずである。彼をとりまく反射光の量は大変なものなので、濃密な大気だけがそれを説明し得るのである。

月の青空をフィルターで変えた?

月の写真から青空がどのようにしてフィルターで変えられたかについて、すぐれた例がある。アポロ14号の飛行士ミッチェルが月着陸船のハシゴを降りる光景を撮った映画がそれだ。

彼が降下を始めたとき、空からの光の拡散の量がひどかったので、空全体が青味を帯びた白色に近い状態だった。加うるに、光の量のためにミッチェルと着陸船の細部を見るのは困難だった。信じられないことだが、彼がさらにハシゴを降りるにつれて、青白色の空はしだいに薄青色に変わり、続いて濃い青色になり、最後に彼が地表に達するまでには極端に濃い青または黒に変わってしまった。そのときまでには、フィルムの細部すべてはわずかな光の拡散現象をとまなつて、輪郭は鮮明になっていた。

画面中の次の場面は、前に述べた国旗掲揚式の光景で、暗黒の空になっている。ミッチェルを写したこの画面は、カメラがフィルターをつけた可能性、またはフィルムを地球へ持つて帰った後に他のフィルムと交換したかのどちらかを示している。

いづれにせよ、この出来事は濃密なブルーの月の大気存在することを証明しており、これは同じ映画の挿れる旗によつてすでに与えられた証拠を裏づけるも

のである。意味深長なことだが、月面写真や映画フィルム中の青空をフィルターで変えた可能性がある、という証拠をそれは提供している。

写真10は青空を示す映画の一コマである。ミッチェルが着陸船のハシゴを降りている。

不思議な黒点の動き

これまでに月面上でモヤ、雲、その他の変化が見られたと言われてきた。こうした多くの観測は「月は死の世界か」と題するポール・M・シアーズの記事で言及してある。この記事は「ナチュラ・ヒストリー」誌の一九五〇年二月号に掲載されたものだ。以下はこの記事で述べられた観測的部分的な要約である。

月の大気を示す薄明以外に、もつとすごい証拠は、月の空気中を落下する隕石かもしれない輝く点の動きの観測である。太陽が昇るときに、広がって大きくなる点として知られる不思議な黒い地域が毎月出現するのだ。これは月の表面の他の部分に比較して黒くなるのである。

この「黒点」のなかには日没したが、つてふたたび消えてゆくものもあるし、夜になるまで黒い状態を保つものもある。

こうした黒点群は毎月のように大ききや形が変わるし、なかにはときとして消滅してしまうものもある。

また、まばらな雲がときどき地表の上空をただよって、地表の細部を不鮮明にすることがある。この雲のなかにはそれ自体の影によつて山のふちに輪郭を描く

のものもあるし、他の場所よりもっとひんぱんに雲が見られる特定の地域もある。たとえば、十九世紀に六名の天文学者が月の上空のモヤによつて、プラトン・クレーター^{Plato Crater}の底の細部が不鮮明になったのを見たと言及している。

月面の不思議な現象

右の発見をした天文学者たちは、まじめにとりあげられなかった。月の六分の一の引力ではこんな現象が起せるとは考えられなかったからだ。

一九六〇年に書かれた「不思議な月の世界」で、著者のV・A・ファーフは、月食や月の昼間に、暗い、または輝く斑点の強度の変化を、有能な観測者が記録したと述べている。月面の他の部分が影響を受けないときは、部分的にしだいに見えなくなると言っている。

モヤや雲に似た影や斑点は、輝きや光と同様に、ある地域で何度も現れるのがずつと観測されてきた。ファーフが言うには、こうした現象のすべては簡単に光現象または地球に関しての月の位置のせいにするとはできないという。

ファーフによれば、月のアルプスに輝く地域が存在し、その率によつては周囲の地域が鮮明に輪郭を出しているのに、ときおり輪郭が不鮮明になるのがあるという。しかも危機の海の南東側部分で、ピカール・クレター^{Picard Crater}の近く、ぼんやりとした地帯が多年絶えず見られており、しかもこれは地表の細部を完全に覆っているのである。

フアーンソフは月の明暗境界線の近くで見られる太陽光のことを述べている。これは月の上空高く太陽があるときよりも赤く見えるという。彼はこれを微小な結晶と結合したガスの拡散と考える以外に他に説明のしようはないと言っている。

その他の緑、茶、青、紫などの色が海やクレーター内部などで見られてきた。

これらの強さ、位置、広がりなどの定期的な変化は、色現象が物理的または化学的な変化によって起こることを暗示しており、これは太陽熱の量によるのである。

フアーンソフは生物の活動がこの現象を説明しているのかもしれないと考えている。この考え方は、結果的にNASAが提供した実質的な大気存在の証拠に信用を加えるものだ。

月による星の掩蔽

月による星々の掩蔽は大気存在にたいする別な証拠となる。チャールズ・フアーンソフは一九二三年に「新しい土地」と題する本を書いたが、その中で彼は月によって隠された星々の多くの観測について論じている。見たところ月によって隠れる星々の見かけ上の動きは、フアーンソフが月には大気があると確信していた時代には、きわめて普通に観測された現象だった。

ところが具合の悪いことに、これまでで収集されてきた掩蔽に関するデータは、月の輪郭の不規則な形によってやや不確定にされているのだ。加うるにデータが

きわめて変化しやすいので、月の大気密度の見積もりはあてにならないのである。したがって掩蔽の測定は、そこに大気があるということをはっきりさせるだけで、その密度までは出せないのだ。

月のハロ現象は大気を示すか

日食時のハロ現象は、月のために隠れた星々の場合と同じ問題を提起する。「ライフ」誌一九七九年四月号の表紙に載った日食の写真は、このハロ現象を示すものかもしれない。しかし批判する人は、このハロは全く太陽のコロナでできたもので、月の大気ではないと反論するかもしれない。いずれにせよ太陽のフレアとは関係なく、このハロの厚さは表面から二百四十キロの高度ではほとんど感じられなくなる。

この高度になると、月の大気密度は無視してよい。それはきわめて希薄なので、太陽の光は希薄な空気分子に全く影響を与えなくなる。

月の大気に関する結論は、大気中に保たれるホコリの微粒子や水蒸気の程度をいつも考慮に入れなかつた。この微粒子こそ大気を通して光の拡散を支配する最大の要素なのかもしれない。フアーンソフによると、月の大気はたぶん純粋なガスのように光を拡散するのだろうかという。

一方、これとは違って地球の大気は高い割合のホコリ、氷の結晶、水滴などを含んでいるのである。彼はピクデュミディ天文台の高度（二千八百メートル）でさえも、地球の大気はレイレーのガス拡散

公式が示すよりもはるかに多くの長波長の光を拡散させるが、これは大気の中に多くの分子を含んでいるためだとフアーンソフは言っている。

月の大気は地球で普通に見られるようには強風その他の気象条件を起こさないようだが、これは昼と夜が長いからで、それに月の表面には大量の水が存在しないからである。したがって月の大気はたぶん地球のそれよりもはるかにきれいで、光の拡散現象もわずかなものだろう。

加うるに日の出と日没の色はさほどひどいものではなく、大気のハロは日食のときには低下するだろう。星々の掩蔽も予想されるほどはつきりしたものであるなく、諸発見事を解釈すれば、月にはきわめて希薄な大気があるということになるだろう。だがやはり大気密度は明白なものではないにしても地球のそれと同じかまたは大であるかもしれない。

大気中で燃える隕石

地球と月はその大気ともども同じようにして創造されたと考えても不合理ではない。大気というものは地殻の上層部から固形とガス状の物質の放出によって生じたのかもしれない。地球や月のような天体は、その両方の引力が同じで大気を保つほどのものならば、同じ深さの大気を保つだろう。もし片方が弱い引力を持つとすれば、その大気はもっと深くなるだろう。なぜならガス類は、強い引力を持つ方の大気よりも圧縮される度合いが弱いからである。

大気の深さは引力場の強さに逆比例する。このことは閉じ込められたガスの量は、それに加えられる圧力に逆比例するという、ガスの圧力と量に関する法則に従ったものである。言い換えれば、圧力が倍になれば量は半減するということになるのである。

もし月が地表に関して地球と同じ量の大気を持つとすれば、そのことを示す直接の証拠があるだろうか？

先に引用した記事の中でポール・M・シアースが述べているところによると、一九三〇年代の月天文学者たちは、月面に撃突していると思われる隕石の運命について推測し始めた。計算の結果、月面の暗い部分に落ちる四・五キロかそれ以上の重量の隕石は（空気がないものとして、肉眼で見えるほどに輝く閃光^{フラッシュ}となって崩壊することがわかったという。こうした閃光が毎年百回以上も起こるはずだが、実際には今までの観測史でわずか二、三回の閃光が報告されたにすぎない。これは地面に撃突する前に大気中で燃えつきってしまうことを意味している。つまり月は地球以上に隕石から保護されているらしいのだ！

月面の閃光

このパラドックス（矛盾した事柄）を説明しようとして天文学者は、月の表面の大気密度は地球の大気の一万分の一にすぎないけれども、八十八キロ以上の高空になると地球の同じ高度よりも密度が大になるのだと言っている。これは月面

付近の大気を圧縮することができない六分の一という低い引力にもとづいた考え方なのだ。

しかし、かりに月の大気密度が地球の表面のその一万分の一にすぎなかつたとして、しかもその引力が地球の表面引力の六分の一にすぎないとしても、一單位面積の上空の大気の量は、地球を保護している大気の一万分の六にすぎない。空気の量は地表における隕石の落下を防ぐ最重要な要素であるから、先のパラドックスは天文学者の説明では解決できない。六分の一の引力しかないとなると、隕石の燃焼を説明するに足りるほどの空気が月の大気中になんということになる。シアーズの記事によると、地球で発生すれば火星と報告されるような最も強く輝く隕石ならば、望遠鏡で見ればかすかに見えることがはつきりしているという。

そこで一九四一年に月面観測の最大のベテランの一人であるウォルター・ハースが、月の隕石の長時間観測を開始した。望遠鏡により月の暗い部分を百七十時間探索した後、ハースと仲間たちは月のあちこちの地点で始めて終つた十二個の動く光体を発見したのである。この観測期間中に四、五個の地球上空の隕石が望遠鏡の視野を横切つた。月面の閃光の一、二個はかすかに光る地球の隕石だつたかもしれないが、確率の法則によればあとの閃光は月面で発生したことを示している。

濃密な大気があるとすれば

隕石が月の大気中を通過する際に、地

球よりももつと實際的に停止するように見える理由は今や明らかである。

アポロ飛行を實施中におこなつた測定によると、月の表側にはふくらみが存在していることが示されている。このことは月の裏側の大気密度と深さが平均した密度や深さよりもはるかに大であることを意味している。意味深長なのは、月の表側は基本的にいわゆる海から成り立っていることだ。もと海という名がつけられたのは、それらがみなひからびた海のように見えたからだ。裏側はほとんど山脈をなしており、地球の山脈よりもはるかに高い山があるということになつてゐる。地球でも海洋が水を失えば同じ状態になるだろう。

したがつて、もし月の大気平均密度が地球のそれと同じぐらいたすれば、月の表側の大気密度は地球のどの場所よりも大になるだろう！

そこで濃密な大気は次のような驚くべき暗示をすることになる。すなわち月の大気の種類が地球のそれと同じであるとなれば、月のほとんどの地域において宇宙服や生命維持装置は必要ないということだ。このことはアポロ宇宙飛行士たちが極端に軽い背のうをかついでいたかもしれないことを暗示している。というのは必要な酸素は月の大気が供給してくれるからだ。

こうなることながら宇宙服は真相隠蔽を大にするために映画撮影をやつてゐるあいだだけ使用されたのかも知れない。一場面を撮り終つたあと、宇宙飛行士は宇宙服をぬぎ捨てて背のうを

はずし、全くの自由な状態で月面探険や他の活動で歩きまわることができたかもしれない。

しかし他の地域では地球の高山地帯のように宇宙服が必要だつたかもしれない。もし地球の海洋がなくなれば、多くの山脈地帯や高原はもはや生命を維持するのに充分な大気を持たなくなるだろう。大気は最低の地域を求めて、何マイルもの深さに達する干あがつた海底を満たすだろう。地球の海洋は地球表面の大部分をカバーしているので、数百万平方マイルの地域は無人の土地になるだろう。

月には生命体や植物がある!?

月には長い昼夜があるにもかかわらず、ある地域には生命体や植物が存在し得ることは考えられることである。適当な高度や地域の覆われた谷などには、人間の住めない地域に見られるような極端な温度差はないだろう。地球の極地帯で発生する極端に長い昼夜は、月のある地域に非常によく似た状態を生み出すかもしれない。重要なのは地球でも生命体がこの極端な状態によく適応するという事実である。

先に述べた深う雲やモヤは、月面に水があることを暗示している。観測によると、雲の形成は山脈地帯やクレターの内部のほうが規模が大きいという。そこでは自然の壁のあいだに湿気がとらえられるのだ。深う雲はそれを動かすのに風を必要とする。真空中では放出されたガスは急速に拡散し、漂わない。

大気があるために司令船は月の高空を飛んだのか

月に濃密な大気が存在する別なシルシは、アポロ宇宙船や月探査機が月の表面から百二十キロ高度の平均距離で軌道に乗つたときに示されている。この高度を選んだ理由についてはNASAから特別な理由が公表されていない。

たしかに月に大気がないとすれば、月をまわる衛星にとつて最上の高度は、うんと低くなるだろう。ルナー・オービター類は写真を撮るために月へ送られたのである(訳注)一九六六年八月十日、アトラス・アジェナロケットを使つたルナー・オービター1号が月面の二百一十一枚のテレビ画像を送信して以来、一九六七年八月一日発射の5号まで、いずれも成功して総計千五百六枚の画像を送信している)。したがつてもつと低い高度ならば月の表面のもつと精密な地図を作ることができたことだろう。アポロの司令船でさえもこの高度で軌道をまわつてゐる。

大気があれば、最小限の許容軌道は、空気の摩擦の抵抗により實質的に宇宙船や衛星の速度を落とさぬ程度の高さにせざるを得ない。低い高度の宇宙船に大気が影響を与えると、軌道は急速にくずれ、そのために宇宙船はスピードが低下し、燃えて墜落する。このためにスカイラブその他の衛星のごとき地球の宇宙船が、地球から百六十キロ以上も高空にとどまつたのである。

どうやらNASAが進んだ軌道用の高度は、月の大気のためだったらしい。というのは長時間、もっと低い高度で飛ぶならば、大気が安全な軌道周囲をさまよるからだ。このことは月の大気の密度が地球のそれに似ているかもしれないことを意味するのである。

かつて強い磁場があった？

月探査計画で重要な発見の一つは、月が非常に弱い磁場を持っているということであった。月の磁場の存在は、月の磁場の起源に関するオーソドックスな考え方と矛盾しない。というのは小さな鉄の核がいつもそれを説明するのに応用されるし、核の大きさは発見される磁気の範囲に合うようにされるからである。

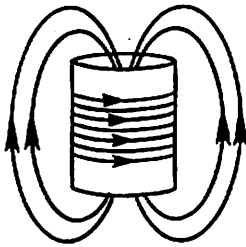
一惑星の磁場について最も考えられる原因は、大気中や地表に存在する荷電粒子の回転にあるらしい。この荷電粒子は惑星とともに回転する。したがって発生する磁場の強度は惑星の回転速度に直接比例している。月の回転速度は地球のそのの一パーセント以下であるから、月の磁場も地球のそのの一パーセント以下ということになる。

月解析計画チームは次の結論に達している。つまり月の岩石に見出される自然の残存磁気は、月がかつて地球の磁場の数パーセントに等しい強さの磁地を持つていたことを示唆しているというのだ。しかしそれがどのようにして発生したかはまだ不明であった。

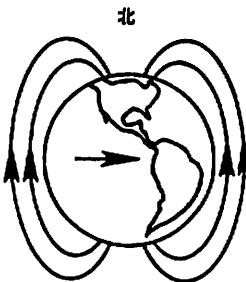
月には鉄の核がない

回転する惑星は電気のソレノイドにたとえることができる（訳注ソレノイドは筒形コイル。円筒に導線をらせん状に巻いたコイル。電流を通すと内部に磁界ができる）。これは図3で示されている。電流がコイルに流されると、導線の方角にたいして直角に磁力が生じる。惑星はその大気中や表面に荷電粒子をとまわっているが、これにより回転の方向すなわち東から西に電流を生じる。すると磁場がこれにたいして直角に、すなわち北から南に生じるのである。

図 3



ソレノイド・コイルのワイヤーを通じて電流が左から右へ流れる。



地球の自転の方向が矢印で示されている。

荷電粒子が必ずしも地球表面に関して東から西に動いていなくても、惑星自体が回転しているためにやはり磁場は生じる。地球表面の物質、表面の不規則な物風などの要素が、地域的な磁場の方向や強さに影響を及ぼすのである。

右に述べたことは地磁気に関して知られている多くの事実を説明している。たとえば、太陽の黒点は太陽の大気と地表の荷電粒子の数を減らすことによって地磁気の影響を及ぼすのである。加うるに、地磁気は太陽から地球へ届く荷電粒子の種々の数により、二十四時間サイクルに従っている。月が鉄の核を持たないという証拠は次章で提示することにしよう。

鉄の核がないということになれば、オーソドックスな物理学者は月の磁気を説明するのが困難になるだろう。しかし、次章での新しいアプローチは筋の通ったもので、鉄の核がなくても月の磁場を説明するのに全く適している。

宇宙飛行士は星を見た

月の実質的な大気存在のもう一つの証拠は、大気圏の上では星が見えないという意味のことをある天文学者達が言っていることと与えられている。

一般の標準的な考え方からそれるような事柄に関してはNASAの政策に合わせるために、このことは広く論議されなかった。

右の事柄が事実とすれば、月の大気は地球の大気に近い状態で星の眼視観測にも影響を与えることになる。そうなることは星は大気を通してながめるときだけ見えることになるのだ。アポロ11号飛行のとき、月に到達する前の二万キロ以内でアームストロングは次のように述べている。

「私にはティコ・クレーターがかなりはつきりと見える。月のまわりのすべてに、その縁にそつても、空を見ることができ。そこには地球の光や日光もないよ」

続いてコリンズが言った。

「いまわれわれはまたも星々を見ることができるし、この宇宙旅行で初めて星座を認めることもできるぞ。……空は星でいっぱいだ……まるで地球の夜の側みたいだ」

また月が太陽の一部分を消したので、宇宙飛行士たちは天空をもっとはつきりと見ることができたともいわれている。

真空中で予測される諸条件は前の章で述べた。大気はなくても月では夜も昼も星々が目に見えるという発言も引用した。実際問題として、ほとんどの星は大気の助けがなければ肉眼には見えないのかもしれない。大気というものは巨大なレンズのような作用をし、星の光を拡散させるのである。星々は非常に遠方にあるので、大望遠鏡でもその少数の円形を解像できるにすぎない。大抵の星はその不鮮明な輝きが望遠鏡で見られるだけで、この不鮮明さは大気を通して星の光の拡散と屈折現象のためである。だから能力の低い人間の目は、大気圏の上にある最も強く輝く星々の少数を発見できるにすぎないのかもしれない。

したがって宇宙飛行士たちが肉眼で見ることのできた星々は、不鮮明なままはまばたく星とは逆に、小さな光点として現れるだけだろう。

大気を通して見えたのか

右の分析の結果、宇宙飛行士たちがふたたび星々を見ることができたというコリンズの言明は、月が太陽の一部を隠したということとは関係がなかったのかも知れない。

なぜ宇宙飛行士たちは太陽からそれた方向の、地球も月も見えない方を見ることができなかつたのか？ 地球と月のあいだの宇宙空間には、かなりな量の光の

拡散は起こるはずはない。したがって、もし宇宙飛行士たちが輝く惑星や太陽などから目をそらしていたら、星々を見ることができたはずである。ただし大気がなくてもそうすることが可能であったならばの話だ。

宇宙飛行士たちは月の近くに到達したときに、月の大気を通してふたたび星々や星座を見ることができたのだろう。

月のブルーの大気層を撮った写真

月の濃密な大気層の存在を示す最も納得のゆく写真の一つが、一九七一年版「発見と探険の百科辞典」第十七巻フレッド・アベル著「月とその向こう側」の一三二頁に掲載されている。

月をまわる軌道に乗っていたアポロ10号司令船の着陸船によって撮られたこの写真は、本書(原書)の写真11に見られる。これを見ると月の大気が地平線上に濃いブルーの層となつて現れている。これは地球の軌道をまわる衛星や宇宙船から撮られた地球の写真に非常によく似ているのである。これと同じ大気層のことを先の引用でニール・アームストロングが言及したと思われる。彼が次のように述べた言葉には正確さが欠けていたのかもしれない。

「月のまわりのすべてに、その縁にそつても、空を見ることが出来る。そこには地球の光や日光もないよ」

ここで筆者がいま述べた写真を入手しようとして体験した困難さを述べてもわ

るくはないだろう。

一九七九年にこの写真を注文しようとして写真番号を問い合わせた手紙が多数NASAに送られたが、回答はなかった。NASA側で調べる手間ははぶけるようにとの配慮のもとに写真のコピーを送った人々がいたけれども、やはり回答は得られなかった。大体にNASAは大衆にたいして無料でこのサービスをすることになっているのだ。

この写真が他の場所掲載されて以来、それはいつも公開されていた。そこで筆者はNASAの写真番号を知るために、「月とその向こう側」の発行所であるロンドンのオルガス・ブックス社の援助を求めたのである。

注文の写真を送らぬNASA

すると一九七九年の十二月に、オルガス・ブックス社のデービッド・バラモアが筆者の要求に答えて、NASAの写真番号を69・HC・431と知らせてきた。彼の指摘によるとNASAは「月とその向こう側」の中にそれを使用する許可を与えたという。そこで筆者はNASAの写真係に月面写真69・HC・431を注文し、ついでにその写真のコピーも送った。正しい写真が来るようにするためである。

注文した写真が到着したとき、筆者は一枚のスライドに個々に分類されたアポロ4号の二十四枚の写真類が写されている一枚の写真を受け取った。各写真にはアポロ4号の写真が撮られた年を示す66

または67で始まる数字がつけてある。しかし筆者はアポロ10号の写真69・HC・431を注文したのである。奇妙なことに69・HC・431という数字のラベルがスライドの片隅にテープでとめてあった。ところが69・HC・431というのは正しい数字ではない。

NASAの写真番号の最初の二つの数字は、その写真が撮られた年の最後の二ケタを意味するように符号化されている。したがって69・HC・431は1969年に撮影されたのであって、アポロ4号ロケットの写真であるはずはない。

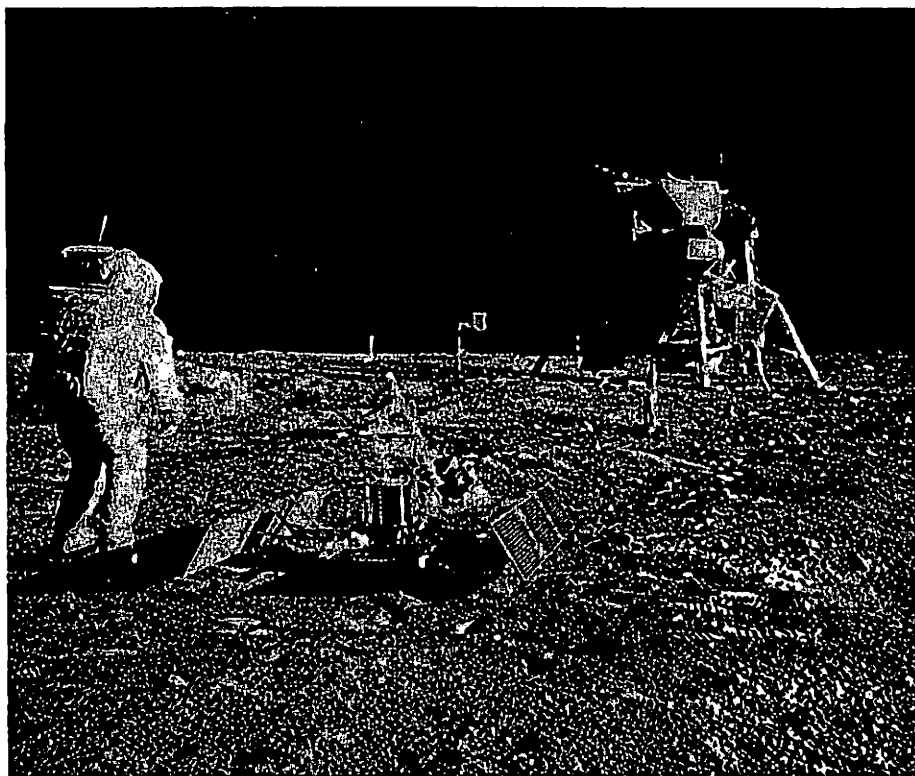
また重要なのは、NASAの写真係に注文した五十枚以上の写真のなかで、これがテープでラベルをつけた唯一の写真だという点である。

右の最初の試みから一年以上たった一九八一年七月に、筆者はその写真を入手するべく、そのコピーと69・HC・431という番号も添えて、再度NASAへ注文した。その際筆者は最初の注文時に写真係とのあいだに生じたトラブルのことをNASAに知らせた。アポロ10号の写真のかわりにアポロ4号の写真類が送られてきたと書いたのである。残念ながら本書の原稿が印刷所へ送られた時点で、注文から一年半以上にもなるのにNASAは何も送ってよこさない。しかし明るい面で見れば、その写真を入手しようとした筆者の体験により、写真におとらぬほどのNASAの軍事機密に関する多くの証拠を得たのである。

インチキだらけのNASA

月の地質と地球・月システムの構造に取り組む前に、別な出来事を述べることにしよう。これはNASAがいろいろな事実を隠そうとすうていかに躍起になつてゐるかを示すものである。

アポロ15号の飛行のとき、一本のハンマーと一本の羽毛が同じ割合で落ちる光景が見せられたと思われていた。この目的は月面の真空状態と、ガリレオの有名な引力の実験、すなわち異なる大きさ



▲アポロ11号の宇宙飛行士。

異なる重量の物体は等しい速度で落下するという実験を見せるためであった。

実質的な月の大気を示すあらゆる証拠にかんがみて、ここにただ一つの妥当な結論があるように思われる。すなわち、もしその二つの物体が同時に地面に落ちたとすれば、羽毛はたぶんかなり重い物体で作られていることが隠されていたのだろうということだ。

アポロの各飛行のときに多数の観察者は本書に述べられたさまざまな矛盾に気づいている。ビル・ケイシングのとき人々は、アポロ飛行はインチキであり、そのときのテレビ放送や写真のすべては地球のどこか遠い場所で作られたと確信している。ケイシングは一九七六年に、「我々は全く月へは行かなかった」と題する本を書いている。もし彼がいまだに月には大気がなく、その引力は地球の引力の六分の一しかないと思われているならば、彼はアポロ飛行が（実際に行われたのだけれども）ごまかし飛行であったと結論づけるのを正当化していることになる（訳注）ケイシングは、アポロ飛行の月面着陸の場面は大気のある引力の強い場所であったとみて、これらを地球のどこかでひそかに撮影されたインチキ写真だと断定したのである。

政府の一機関であるNASAや宇宙飛行士たちがケイシングの断言を否定するとは考えられない。彼らはさまざまな矛盾をうまく説明するという不可能な仕事に直面するよりもむしろ矛盾を無視するだけだろう。

いまままでに多くの読者は月の濃密な大

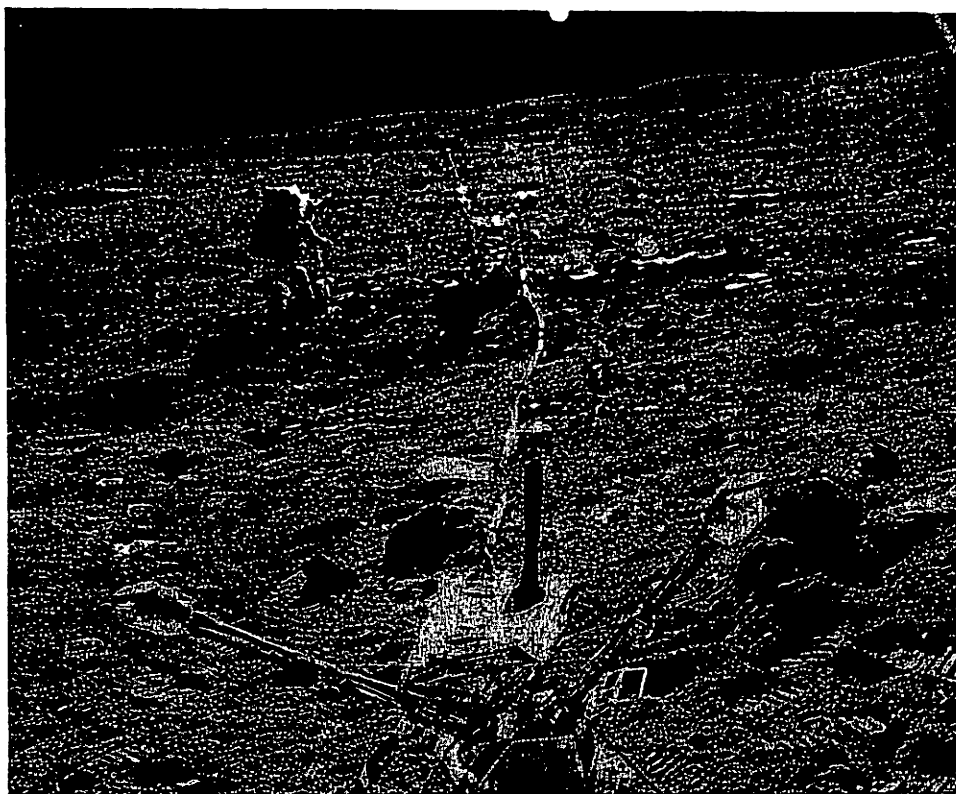
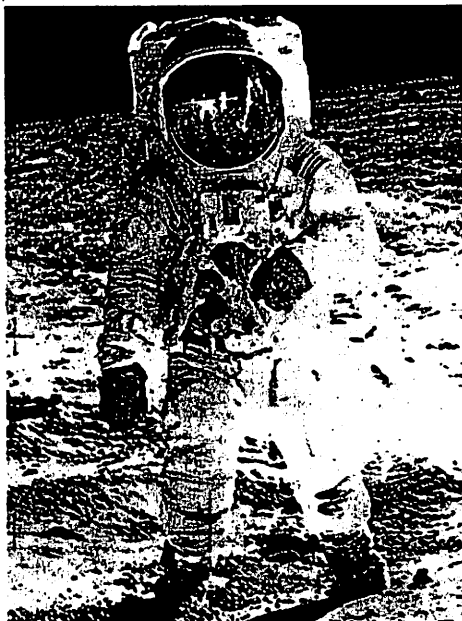
気についてこうまで多くの証拠があるのに、なぜそれが世界の科学者によって一世紀以上も無視されたのかと、首をかしげるかもしれない。

その理由は、実質的な月の大気は月の強い引力を意味するというところにある。かわつて強い引力は、従来の古い物理学の上部構造は不安定な土台をもつので、この事実が認められると大打撃を受けるかもしれないことを意味するのである。こうした諸事実が引力とそのコントロールの仕方についたカギであることを軍部は知っている。いづれにせよ、特定の事業などを支配する既得権を有する団体（NASAなど）というものは、一般大衆を犠牲にしてそれ自体の安泰をうかがっているのだろう。

（第7章完。以下次号）

（訳注）ブライアン氏は「月面に濃密な大気と強い引力が存在するにもかかわらず、宇宙飛行士たちはいかにもそれが存在しないかのように月面で演技したから、アポロ飛行はごまかしの飛行であった」と断言し、一方ケイシングは「月には大気がなく引力も弱いにもかかわらず（ケイシングはそう信じていた）宇宙飛行士たちの行動は大気と強い引力のある場所で見られないようなものだったので、アポロ飛行なるものは月面ではなく地球でひそかに行われたインチキだ」と主張しているから、彼の主張は月に大気と強い引力が存在することを逆に裏づけることになる、とブライアン氏が言っているのである。

▶宇宙飛行士オールドリン。バックの空は黒く塗りつぶされて地平線がきわめてシャープに出ている。



▲アポロ12号の飛行士が科学実験装置をセットしている場面。
空が暗黒に塗りつぶされて、この地平線も異様にシャープに出ている。
こうした修整の跡に一般人が気付かないのは驚くほかない。

超低空で接近した アダムスキー型円盤

▼目撃者・上村和代さん



遠藤昭則

目撃者は上村和代さん(24)という中学校の先生。昭和五十一年の大学三年生のとき、秋のある日、千葉県習志野市の一角でアダムスキー型の円盤が超低空で接近して上昇するのを目撃した。本人は高校二年のときにも川口湖で光体の動きを見るという体験その他もあり、誠実で温厚な性格と相まって、この目撃記録はアダムスキー型円盤がいまだに世界各地はあるか日本にも出現している事実を確証する貴重な証言である。この記事は本年四月二十五日に習志野市の「習志野レストラン」にて久保田先生立会のもとに長時間行われた取材記録である。

川口湖畔で不思議な光体を見る

上村さんは静かに語る。
「まず記憶に新たなのは、高校二年生のときに富士山のふもとの富士吉田という所でUFOを見た記憶が鮮明に残っています。部活動のバスケット部に入っていたものですから、その合宿で一同と共に宿泊したときのことです。」

夜サイクリングで川口湖まで行こうとしたとき、宿舎を出て星を見ていますと、星々のなかで一個の星が横に動き始めたんです。初めは流れ星かなと思っただけですが、ほかの友達もほかの方向を見ていたので気付かなかったのですけれども、流れ星だったら斜めに落ちますが、いつまでも落ちないで横に水平に動いているものですから、おかしいなと思って、まわりの友達を呼んで一同で見るときにはパッと消えてしまいました。」

「動いたスピードはどれくらいですか。流れ星の速度よりはちよつと遅い感じでした。見ていて真横に動いているような状態でした。星と似たような色でしたから初めは星だと思っただけです」

時刻はいつ頃ですか。

「明け方の四時近くだったと思います。富士吉田市に千葉県習志野市の青年の家というのがあります。そこに泊っていたときです。その玄関を出たすぐの所です。それがUFOかなと思っただけの目撃体験です。昭和五十一年のときでした。」

「それまでにUFO(未確認飛行物体。俗に空飛ぶ円盤とか宇宙母船などといわれる謎の物体)のことを知っていましたか。」

「はい、知っていました。宇宙の科学的な事柄に興味がありましたので、それに関連してUFOのことに関心がありました。中学生の頃からテレビでUFOのことをやっていましたのでよく見ましたから気にはなっていました。しかしUFOの本を買って読むという段階には至っていません」

窓の外にオレンジ色の丸い光体

「その次にUFOを目撃されたのはいつですか。」

「中学三年のときだったか高校一年のときだったかはよく覚えていませんが、右の体験よりも少し前のことです。家で夜遅くまで受験勉強をやっていたとき、窓の外に二十五センチぐらいの直径の、

なんて言うかな、オレンジ色をした発光体を見たんです。十二時をまわっていたもんですから目の錯覚かなと思っただけです。」

しかしサッシの窓で、半分下がクモリガラスになっていて、その上は透明ガラスでした。その部分はカーテンがあいていたんで、勉強に疲れたもんですから外を見ていましたら、直径二十五センチぐらいの大ききのオレンジ色で、太陽を少し小さくした程度の発光体が下から上にゆっくりゆっくり上昇したんです。それが消えるまで見ていたんですが、だれも一緒に見ている人はおらず、一人だけのものですから、錯覚ではないかと思ったり、あるいは心霊現象ではないかと思ったりしました。私の実家の窓から見ただけです。でも錯覚ではなかったと思います。」

目撃した時間は?

「約五秒ぐらいでした。その場所は習志野市の東習志野五丁目にあつた家です」

「ご本人は四月末に結婚をひかえて多忙にもかかわらず、こころよく取材に応じられた。ご家族はご両親、お兄さん夫婦、それに妹さんと六人家族。新郎になる方は高校時代の同級生で、結婚後は大矢姓に変わるとの由。ご本人は二十六歳の小柄な丸顔の愛くるしい女性で、年齢よりかなり若く見える。習志野市立第四中学校の家庭科の先生である。」

超低空でグアーツと接近した 円盤!

「アダムスキー型円盤が超低空で出現

した状況について話して下さいませんか。
 「最初見たときは空中に大きなハダカ電球があると思っただけです。坂の上の方から車で運転してきて、見晴らしがよかつたものですか、前方を見ますと、電球みたいに光ったものが見ええたんです。それでなんであんな高い所に電球があるのかなと思いが、坂をくだって行きましたら、その光る物体が上昇したんです。それで、おかしいなあと思つて、初めはヘリコプターかなと思つて車をとめて、少し観察しようと思つて見ていたんです。そしたら物体は上昇してからすぐにこちらへ向かつて動き始めました。わりと速いスピードでヒューッと飛んできたものですから、ちよつとこわくなりました。それで車の下へ身をかがめて顔だけ窓の所からのぞかせて見ていたところ、斜め右上の方向に飛んで行きました。物体はかなり接近していたようで、最初大きさは約五、六メートル先の直径五十センチぐらいでした」
 —形はどうですか。
 「下側が丸くなっていて、上部はドーム状でした。そしてオレンジ色の窓のような発光部分がドームのまわりにポツポツとついているのが見ええました。その数はわかりませんが、一つや二つではなかつたようでした」
 —底に何か見ええましたか。
 「物体が接近してきたときは全体がぶい銀色に輝いていて、窓のように見える部分からオレンジ色の光が洩れていたんです。底の所は少し暗くて光っていませんでしたが、ボールを半分に切つたよう

な形の物が足みたいについていて、それが三つ見ええました」

—そんなにはつきり見えたのなら、物体がかなり低く降下したと思われませんが、高さはどれぐらいですか。
 「さあ、その物体の大きさがよくわかりませんから、高さは見当がつきません。しかしずいぶん接近した感じでしたから、瞬つれて行かれるのではないかと思つていましたわ。こわくなつて、隣に座つていた許婚者に「あつ、来た」と言つたんです。そのとき私が運転していました」

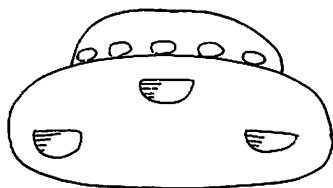
—その物体が見えていた時間は？
 「一分間以内だつたと思います」
 —その場所はどこなのですか。
 「千葉県習志野市東習志野の林のある通りです。特にこの通りには名がつけてないんですが、隣に日立製作所の工場があります。この道路は南北に走つていて、写真では手前が北で、前方が南です」

—目撃時の年月日と時刻は？
 「私が大学三年生のときで昭和五十五年だつたと思いますが、月日はよく覚えていません。季節は秋の初め頃だつたような気がします。時刻もわかりませんが、たしか夕暮れ近い頃でした」

上村さんは千葉県市川市にある和洋女子大学の家政学部出身である。
 —あなたと一緒に円盤を目撃された許婚者というのは何という方ですか。
 「大矢政明といまして、八千代市に住んでいる二十五歳の青年で、習志野の市役所に勤めています。船橋東高校の同級生でした。この人の自動車に二人で乗つて私が運転していたんです」

▼上村さんと許婚者が目撃した円盤の移動状況。





▲上村さんが目撃したアダムスキー型円盤。本人のスケッチ。

大矢さんはそれまでにアダムスキーの名を聞いたことがなく、アダムスキー型円盤の写真も見たことはなかったという。筆者がその写真類を見せたところ、ちょうどこのような物体だったと強調した。

特異な現象が続いた

——あなたがたびたび一人でUFOを見るといふ不思議な体験があるということ、は、ご自分の運命か人生問題にかかわりがあるとは思いませんか。

「中学、高校、大学を通じて、この成長期には何か自分の感受力が高まっていたように思います。何度か心霊現象的なことを体験したこともあります。しかし自分一人だけの体験ですから錯覚だったといわれても仕方ありませんけど——」
——その心霊現象的なこととは、どんなことですか。

「中学の部活で運動部に入っていた頃、帰宅が遅くなるが多かったんですがある夕方、帰宅途中に目の前を火の玉がサーッと通りすぎるのを見たことがあり

ます」

——それもUFOではありませんか。

「いいえ、かなり近い距離でした。それは白色に光る物体です。その他にも夜睡眼中に金縛りになることもあって、ひどいときは三日に一度ぐらいい続いたこともあり。その最も苦しかったときには母親を呼ぼうと思っても声が出ないんです。それで何とかして助けてもらいたいと念じていたら、部屋のフスマがスツと開いて、白っぽい浴衣を着た母親が現れて、「どうしたの?」と声をかけたんです。そのとたんに金縛りがとけて気分がよくなったんですから、「いま金縛りにあつて苦しかったので、お母さんと呼ばうと思っていたが声が出なかったのよ」と言いましたら、母が「疲れているんだらうから心配しないで寝なさい」と言つて、また母は寝たんです。

私はこわくなってフトンをひつかぶつてそのまま寝たんですが、翌朝目が覚めて母を見ると、パジャマを着ているんです。おかしいなと思つて、「お母さん、昨夜は浴衣を着ていたでしょう?」と聞くと、「いや着てなかったわよ」と答えるんです。そんなことがありました。

またある夜、鏡の前で風呂から上がつて髪を乾かしていると、うしろの一面鏡に黒い男の姿が見えて、うしろをパッと横切ったんです。それで「お父さんだな」と思つて、うしろを振り向いたらだれもいないんですから、少しこわくなって、すぐ寝てしまいました。

男の顔を透視?

そんな奇妙な体験が二、三年間に集中的に続きました。高校二年のときにテストのための勉強をしていて、夜十一時頃でしたか、寒いのでヒザまでフトンをかけて、世界史を暗記していました。プリントを見ながらひよいと顔を上げると、長く伸ばしていた自分の両足の足首の上約三センチぐらいの空間に、男の人の半透明の顔が映つて見えるんです。アレッと思い、また錯覚を起こしたのかと思ひながら目をこらしてジッと見つめてみますと、それが消えませんが、いまでもその顔をよく覚えていますが、色白で、目もまゆ毛も細い人で、逆三角形のほっそりした顔で、鼻筋も通つており、髪の毛は七三にきちんと分けているんです。うしろのフスマが透けて見える程度の半透明の顔でした。

それは全然知らない人です。ですからこれは将来結婚する相手ではないかと思つたんですが、いまになつてみますと、いまの許婚者とは全然違うんです」

——その映像は日本人タイプの人ですか。

「ええ、日本人の二十歳代後半から三十歳ぐらいまでの人でした。全く思いあたらない人でしたが、目はあいているのか閉じているのかもわからないくらいで、動かないでジッとしていました。見えていた時間は二、三秒間で、次の瞬間ちょっと目をそらしてまた見たら、もう映像は消えていました。顔はすきとおつた感じで、非常に鮮明でした。私の目から距離にして約一メートルぐらいです。顔の大きさは実物大でした」

——遠方の人を透視したのか、それとも

家裏に残る残留波動が影像化して見えたのではないのでしょうか。その家は昔からの家ですか。

「いいえ、現在の家は建て直したもので、その前に建っていた古い家でのことです。古いといつても私が小学校五年のときの建築です。ですから十五年ぐらい前に建てた家で、三年前に建て直しました。その土地はずつと以前は原っぱで、建売り住宅が五十戸ぐらい出来たときに一軒買つて入ったんです。ですから土地は変わっていません。建て直してから二階建にしました」

——なるほど、それでは家屋の残留波動というものはないでしょうね。やはりあなたの特異な性質とか体質という何かあるんじゃないでしょうか。

「自分ではべつだん何とも思つていませんが——」

——これは「心霊」というよりもむしろあなたの能力に普通人以上の何かがあると思ひますね。透視力でしょうか。

——さあ私にはよくわかりませんが、知らない場所へ行つたときに、ここは以前来たことがあると感じる人は大勢いると思ひますが、私は肌で感じて「ここから先へは行きたくない」と感じることもあります。ほとんど当たりません。高校時代にはテストのヤマカンがよく当たつて、友達がよく聞かれました。

自分の中で電気がパツとつくような調子で、パツと思つたことが当たつたことがよくありました。友達との結婚の時期などは電気がパツとつくような調子で当

たりましたわ」

「ふーん、これはやはりテレバシーですね。」

「お宮へ行っておみくじなどをひきますと、そのなかに光るように見えるクジがありまして、それをひくと大吉が出たり賞品があったりするんです。友達と一緒に神社へ行ったり、「じゃ、光るのを探して」といわれるんですが、わりやり探してもだめですね」

「やはりあなたは超能力者なのでしょうね。テレバシーとかなんとかの——。ここで同席していた久保田先生が、上村さんのオーラはどうかと尋ねた。」

「そうですね、かなり密度が濃くて、白っぽい色のオーラが見えます。これは結婚式に近いからでしょう。青か紫色も見えます。去年は少々ピンク色でした。ピンク色は恋とか愛をあらわす色です。」

「ここで先生が口を出した。」
「遠藤君は一種の超能力者です。人間のオーラも見えるし、透視力もあるんです。同じ学校の同僚でありながらそのことを言わないでしよう?」

「ええ、全然知りませんでした」
「そんなすごい能力を持ちながら黙っているところに彼の良さがあるんです。彼自身にもいろいろ不思議な体験がありますよ」

筆者の不思議な体験

先生のベタぼめに大いに照れながら話した。オーラの説明もする。

「青年の顔が見えたという話を聞いて

いるうちに、私に「ある目」が見えたという体験があったことを思い出しました。」

私たちのグループは日本GAPとって、地球外の惑星の偉大な文明や生き方を研究するんです。そして毎年一回東京で総会を開催しますが、その総会の役員を初めて仰せつかったときに、自宅のステレオを聴いていたとき、空間に大きな「目」が見えただけです。

私の家もいまは建て直して二階建てですが、以前は平屋だったんです。その近くに古い防空壕がありまして、この家に入る者には悪い事が起こるといわれていたんですが、家の者はそんなことを気にしないもんで、住みついていたんです。

ところが私が子供の頃に風邪をひいて八帖の部屋で寝ていましたと、薄い着物を着た女の人が歩いてくる姿を見ました。そんなことがあってあの家にはあまりよいフィーリングが起りませんでした。防空壕があった所は暗い色のオーラを放っていました。いま建て直した家は防空壕を埋めて地面を掘り返してしまいましたが、それ以後はオーラもよくなりましたね」

予知透視的中

上村さんが言った。

「私の家も最初の家は好きじゃなかったですね。なんだか暗いイメージがあったんです。いま聞いて、くだらないことかもしれないが思い出したことが一つあります。」

ある日、自分の勘がどれくらいあたるかと思って試してみただけです。大学時代に津田沼駅で電車に乗っていて待ち時間があつて電車のドアが全部あいていたときに、私の前の座席にだれも座っていませんでした。それから、そこにだれが座るか、あててみようと思つて、ポケットとして眼前のシートをジッと見つめていたら、しだいに人間の形が見えてきました。銀白色の人間の姿で、体格のよい人でした。上着が白っぽい人で、そんな人が来て座ったら自分の勘があたると思つていました。

しばらくたって発車の直前に階段の所からトトトツと白いカーディガンを着た体格のよいおばさんが二つ目ぐらい遠うドアーから入って来て、ずいぶん空いていた前の座席の私の目の前に座つたものだからアツと驚きました」

「それは一種の予知透視でしょうね。すごい能力ですね。」
「母も子供の頃から不思議な体験があつたと言っていました。しかし私の不思議な体験をいろいろと人に話してもだれも信じてくれないんです。こんなにくわしく話したのは初めてです」

「趣味は何ですか。」
「着物の着付けをやっています。大学の頃は考古学同好会に入っていました。」

上村さんはみずから「心霊的」かもしれないがと断っているけれども、これは日本では超常現象的な事柄をすべて「心霊」という言葉で表現する傾向があるために、なにげなく「心霊」という語を使用したと思われる。しかし彼女の体験は

死者の靈魂と関連づけられがちな「心霊」の世界とは関係はない。これはどうみてもテレバシーまたは透視能力の発現現象である。こうした超能力をすべて「心霊」の二字でかたづけられるのはあまりに単純であり、間違っていると思う。

彼女はありのままを淡々と語っており、言葉を選びながら慎重におそろおそろ話すという調子ではない。それは本人の体験が真実そのものであり、そのことに自信があるからだ。しかもアダムスキー型円盤は許婚者と二人で目撃しているから、これはいわゆる「心霊的」なものではない。しかも目撃した物体がわれわれの言うアダムスキー型円盤そのものにほかならないことを確証しているのである。

いまだにアダムスキーをインチキだと騒ぎだてる国内外の自称 UFO 研究者たちのわけのわからぬ感情的な盲動こそ、まさにまやかしかつてあることをこのカプルの目撃体験が冷静に指摘しているのだ。なぜなら三十二年前にアダムスキーが発見したアダムスキー型といわれる円盤は、いまだに世界中はおろか日本にまで出現しているからである。

われわれは真の目撃報告者、真の UFO 研究者とはだれであるかを的確に認識しなくてはならない。そして原稿料かせぎや売名に走ることをしな、宇宙的な真実を知りながらカルマのある人たちが宇宙的レベルに引き上げようと指導している人はだれであるかをよくわきまえる必要がある。UFO 問題については複雑怪奇な興味本位の情報が氾濫しているので迷わぬように自重しよう。

山腹に UFO を見た 目撃者 加藤桂子さん



目撃者
加藤桂子さん

清水 南

山梨市在住の女性加藤桂子さんは、高校在学中よりたびたび不思議な UFO を目撃するという特異な体験の持主。特に四年前に、小仏トンネル付近で山腹に着陸している大型円盤らしき物体を姉と二人で見るといふ素晴らしい事件が発生した。以下はレポートと加藤さんとの対話。

— 加藤さんは何度か不思議な UFO を目撃されているそうですが、最初にこらんなったのは、いつ頃のことですか。
「高校生のときです。十年ぐらい前から昭和四十九年の秋だと思います」

— その場所はどこですか。
「英和高校のテニスコートです」
— 英和高校といいますが、甲府駅の近くで、駅より東北の方ですね。
「はい、学校は愛宕山にあります」

— UFO は、いつ頃出ましたか。
「夕方です。クラブの人たち十五名ぐらいでテニスの練習をしていました。そのときです。私が見つめてみんなに知らせたんです」

— どちらの方向に出たんですか。
「学校の西の方に南アルプスが見えますが、その前の方の山の中腹のあたりです」

— よく見えましたか。

「はい、よく見えました。学校は山の中腹のようところにありますから、見晴らしはいんです」

— どんな感じの物体でしたか。

「オレンジ色に輝く光が見えました。そしてときどき白っぽく輝くときもありました」

— 大きさはどのくらいありましたか。

「二、三センチくらいに見えました。大きな星を三つ、縦に並べたぐらいの大きさでした」

— 動いていたんですか。

「最初止まっていたんですが、ちよつと揺れていました。そのうちジグザグ型に動き出して、上に行ったり下に落ちたりというような感じで動いていました」

— 他の人たちは何と言っていましたか。
「ヘリコプターじゃないかしらとか、いや UFO だわ、などと言っていました」

— 高度はどれくらいでしたか。

「私たちのいた前の方に六階建ぐらいの山交パートが見えていましたが、その二倍ぐらいの高さのところでした。わりに低いところですが、遠くに見えました。二キロぐらいかしら」

— 二キロといいますが、甲府の町の上空ですね。

「そうだと思います」

— どれぐらいの時間、見えていたんですか。
「五分が十分ぐらいです。ずいぶん長いあいだ見えていました。テニスクラブの人たちも練習をやめて、みんなでしばらく見っていました」

— そのときにどんな感じがしましたか。

「何かとても不思議な感じがしたのを覚えています」

— それからその UFO はどうなつたんですか。

「突然スーッと消えてしまいました」
— どこかへ飛んで行ったのですか。
「いえ、その場でスーッと消えてしまったんです。また出るかと思つてしばらく待っていましたけど、もう出ませんでした」

— そうですか。不思議な UFO ですね。

「はい、とっても不思議でした」

山腹の不思議なドーム型物体

— ところで加藤さんはこの他にも大変不思議な UFO を何度かこらんなつたそうですか、日頃いつも UFO を見ようとして空を観測していらいっしやるんですか。

「最初の UFO を見てから、ときどき、また出ないかと、天気の良い夜や昼間などには空を見えています」

— そうですか。私も夜空を見るのが大好きですが、空を見るのはずいぶん夢があつて楽しいですね。

「ええ、すてきな気分になりますね」

— それでは二度目に目撃された話をおうかがいしますが、どんな UFO ですか。
「大きな円盤が着陸していたんです」

— えっ、大きな円盤が?!

「そうです」

— それは大変すばらしい目撃ですね。着陸している UFO を目撃するというのはずいぶん珍しいことですから、くわしくおうかがいして全国の UFO ファンや GAP の会員の方々にお伝えしたいと思ひますので、よろしくお願ひします。

その目撃は、いつ頃のことですか。

「今から四年前の昭和五十五年の秋です。日時ははっきり覚えていませんが、たぶんお昼近くだったと思います」

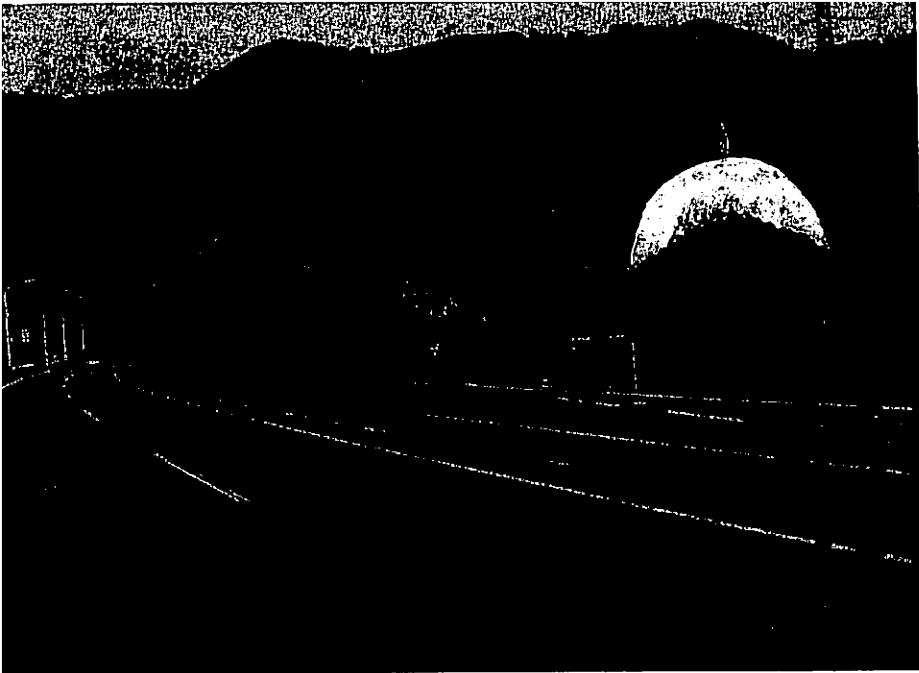
— 目撃された場所は?

「中央自動車道を山梨県から東京に向かって行くと、神奈川県相模湖をすぎた少し行ったところに小仏トンネルというところがあるでしょう。そのトンネルの入口の市側の山の中腹のところですよ」

— 最初どんなふうにして気がついたんですか。

「ちょうどその日に東京に用事があつて姉と二人で出かけたんですが、私が車を運転して東京に向かつて走っていたんです」

— 相模湖インターをすぎて少し行ったと



▲加藤桂子さんとお姉さんが目撃した小仏トンネルのそばの白い巨大なドーム型物体。これはレポーター清水南氏撮影の現場付近の写真に白色のドームを描き込んだもの。

ここで、カーブが終わると小仏トンネルの入口が見え出すところがあります。そこへさしかかったとき、おやつと思っただけです。トンネルの入口の右手の山に建物が見えたんす。姉もいっしょに気がつきました」

—変わった型の建物ですか。

「建物の形も変わっていましたが、そ

れよりこの建物が変な場所に急に出来たので少し驚いたんです。姉もなんだか変だわねえと言っていました」

—そのときのお天気はどうでした？

「すごくよい天気でしたから、よく見えましたが」

—その道路は当時よく通ったんですか。

「一週間に一回ぐらいはこの道を通って

いましたので、急に建物が出来たと思っただけです」

—どんな型の建物に見えたんすか。

「ドームのような型で、ほぼ円型ですけど、上の半分だけが見えていました」

—どんな色をしていました？

「銀色に光っていました」

—光を出していたんですか。

「いいえ、光を反射していたんです」

—よく見えたんですか。

「最初は五百メートルぐらいの距離の所から気がつきましたけど、なにしろ森の中にピカピカ光っていましたから、はっきり見えました。それからだんだん近づいて、そばで見ました」

—どれぐらいの距離から見たんすか。

「いちばん接近したときで三十メートルか三十五メートルあったかしら」

—そんなに近くで見たんすか？

「そうなんです。近くですよ」

—そのドーム状の「建物」のあった場所をくわしく教えてください。

「はい、あそこは北側に東京方面への上り車線と、南側に下り車線が少し下を平行して通っていますが、その下り車線の南側の山の中腹のところに物体があったんです」

—トンネルの入口のそばですか。

「下り車線のトンネルの出口は少し奥の方に見えています、ちょうど上り車線のトンネルの入口の横のあたりです」

—現場はどんな場所ですか。

「下り車線の続きの山の急斜面で、その山の上の方には高圧送電線と鉄塔があり、大きな立木がいっぱいあって、普通の建

物を建てるにはずいぶん不自然な所です。あんな急斜面にどうやって建てるのかなと思うぐらいの所ですから」

—そのときお姉さんは何と言っていました？

「姉も急に建物が出来たので、宗教団体の建物じゃないの？ いつのまに造ったんだらうねと言っていました」

—どんな感じの建物でしたか。

「イスラム教のモスクのような感じの建物でした」

加藤さんは何度も海外旅行に出かけているので、モスクのこともくわしい。

—大きさはどれぐらいですか。

「けっこう大きかったですよ。そうですね、直径十五メートルぐらいはあったと思います」

—大きいですね。普通の住宅と比較して、その大きさはどうでした？

「もつとずっと大きく見えました」

—高さは？

「丸いドームの上の方半分だけで七、八メートルぐらいです」

—下の部分はどうなっていましたか。

「下の方は立木にかくれてよくわかりませんでした」

—何か特徴はありましたか。たとえば窓があったとか。

「窓などはありませんでした。表面はツルツルで光っていました。ちょうどステンレスみたいに。あつ、そうだ、ドームの上にアンテナがありました。長

アンテナが突き出ていた

いアンテナです」

「どれぐらいの長さですか。」

「長かったですよ。はつきり見えていました。七メートルぐらいです」

「アンテナの色は？」

「建物と同じ色でシルバーです」

「全体が動いているような感じを受けませんでしたか。」

「止まっていました。そのときは建物だと思っていましてから」

「どれぐらいの時間、見ていたんですか。」

「高速道路ですから少しスピードを落としましたが、三十秒ぐらいかしら。トンネルの入口の南側の方にその建物はありました、トンネルの手前は高い土手になっていましたので、見えていたのはその土手の所までです」

「そのとき、その『建物』らしい物を見て、どんな感じがしましたか。」

「トンネルに入ってから姉と二人で、なんだか変ねと言っていたんです」

「この『建物』がどうしてUFOとわかったんですか。」

「私たちはこの日東京に泊って、その翌日またこの道を山梨に向かって帰ってき

たんです。それで昨日見たあの『建物』を今日ははつきりとよく見ようねと話しながらトンネルを抜けたんです。ずいぶん期待していたんですが、昨日の『建物』がないんです」

「よく見たんですか。」

「私も運転しながらよく見ましたし、姉もよく見ましたが、見当たらないんです」

「お姉さんは後ろを振り向いてよく見

たんでしょね。

「そうです。前日に『建物』があった場所はよく覚えていましたから」

「でももう消えて何もありません」

「びっくりしたでしょう。」

「ええ、ずいぶんびっくりしました」

「お姉さんはこのとき何と言っていましたか。」

「あれはUFOじゃないのと言っていました」

「あなたはそのときどう思いました？」

「私もすぐUFOだと思いました」

「次の週もそこを通っただけです」

「はい、通りましたが、やはりありません。あのとき一度見ただけです」

「UFOとわかって何か思い出されたことがありませんか。」

「そういわれば、なんだか少し浮いていたような気がします。あのときは建物とばかり思っていました、あそこにはずいぶん高い木がたくさんあって、その物体の上の方だけが見えていたという感じでした」

「なにか音はしていませんでしたか。」

「別に聞こえませんでした」

「立木が倒れていたたり、その場所が伐採されて建物が建てられたというような感じはしなかったんですか。」

「あの日はすごくよい天気、景色はよく見えましたから、そのような感じは全然ありませんでした。木立は自然のままでしたし、後に見たときも変わっていませんでした」

「そうですか、やはり大型UFOが着陸していたんですか。」

「はい、UFOだと思います」

「UFOはそこで何をしていたんですか。」

「さあ、わかりません」

「直径二十メートルはあった？」

「以上の話を今年五月三十一日に拙宅で加藤さんにお聞きしてから、筆者は六月二日(土)、日本GAP東京月例研究会に出席する途中、カメラを携行して中央自動車道を高速定期バスに乗車して山梨県よりUFO着陸現場へ向かった。」

「当日は天気もよく、晴れていたもので、走るバスの中から現場の写真を写しながらその場所を確認した。」

「この小仏トンネルのある場所は神奈川県と東京都の境にあたり、トンネル付近の山は険しく、特にUFOが着陸していたといわれる場所は大きな常緑樹が繁茂しており、大変幽幻な感じを受ける場所である。こんな所へ何の目的でUFOが着陸したのだろうか。」

「加藤さんの言うとおり、一つのカーブが終わって現地が見えだすと、非常に見通しがよく、そのままゆるいカーブで五百メートルぐらいいはUFOが見えていたと思われる。」

「筆者撮影の写真を後日加藤さんに見ていただいた、写真内にUFOの形とアンテナなどを正確に描いていただいた。それによると、直径十五メートルという数値よりも少し大きくて、直径二十メートルぐらいいあったのではないかと気がする。」

目撃者加藤桂子さんは中学校から短大までキリスト教系の学校を出て、その後もアメリカで英語の勉強を続けた知的な純粋な女性。特に聖書は現在も研究中で、この中にはUFOに関する記事がたくさん出ていると語る。

趣味は家族そろって旅行だそうで、今年もヨーロッパ、エジプト、中東をまわり、特にエジプトのピラミッドには以前から強い関心をもっていたので、現地でも自分の目で見たときは感激したという。

また古代史や考古学にも関心が深く、各地の遺跡をまわり、巨石文化の研究もおこなっている。

仕事は家族ぐるみでインド喫茶店と、日本の骨董品と古美術品を販売する店を経営し、この方面でもずいぶんくわしい。個人的に三味線と琴も習っており、日本の伝統的な芸事に関心をもちながら、きわめて現代的で美しいお嬢さんである。

ちなみにまだ独身とのこと。

「アダムスキーの名前は知っていた」

「最初にUFOを目撃したときにアダムスキーのことを知っていましたか。」

「小学生の頃、絵本に出ましたから、アダムスキーという名前とアダムスキー型UFOなどは知っていました。また、アダムスキーの金星人とのコンタクトも少しは知っていましたが、くわしくは知りませんでした」

「アダムスキー氏のコンタクトのことをくわしく知ったのは、いつ頃ですか。」

「今年、アダムスキー全集第一巻『宇宙

からの訪問者」を図書館で見つけて読ん
でからです」

「日本GAPにはどんなきつかけで入
会されましたか。」

「私は宇宙、UFO、古代史などに関心
がありましたから、ときどき書店や図書
館に行くんです。そんなとき図書館で日
本GAP機関誌「UFOコンタクト」
を見つけて今年四月に入会いたしました」

「あなたは五月の東京月例研究会に初
めて参加されましたが、そのときはど
んな感想をおもちでした？」

「皆さん熱心な方ばかりで感心いたしま
した。私はまだ入会したばかりなので、
アダムスキー氏のお話しやっていること
がよくわからないことがたくさんありま
す。けれどもカードの透視などはすぐ
興味がありますから、月例会でのテレバ
シーや透視の練習などはぜひおんよかっ
たと思っています」

敷島町の山中にもUFOが着陸！

「あなたは今までに見たUFOのこと
を他の人に話したりしましたか。」

「私はUFOが好きですから友達にはよ
く話します。友達にもUFOの好きな人
やUFOを見た人がいますし、またその
友達が他の人から聞いたUFO着陸の話
なんかも聞いたりしています。けっこう
多いんですよ、こういう話は——」

「ほほう、まだほかにもUFOが着陸
したという話があったんですか。その話
もちょっと聞かせていただけませんか。
「この話は友達からのまた聞きですが、

その人が小学生の頃、甲府市の西の敷島
町の山へ学校の遠足に行ったそうです。
そうしたら山の中にUFOが着陸してい
たそうです。そうしたら先生が、このU
FOを見たことをだれにも話してはいけ
ないよと口止めしたということです。で
すからしばらくのあいだはその話は伝わ
らなかつたんです」

「そんな事件があつたんですか。全
然知りませんでしたね。」

「その他にもUFOに追いかけられたよ
うな感じがしたという話を聞いたことも
あります。九州の人ですけど」

「昼間にですか。」

「いいえ、夜です。車でその人とそのお
母さんと妹さんの三人で家に帰る途中、
前方の山の中に大きな光体が出たので、
何かなと思つて見ていたら、それがだん
だん大きくなってきたので、追いかけら
れるような感じがしたというのです」

「ぜひおんいろいろな話がありますね。」

UFO出現前に予感

「あなたの別な目撃体験についてお聞
きたいのですが——。どんなUFOを
ごらんになりましたか。」

「ゆっくり回転するUFOです」

「ほう、これも珍しいですね。いつの
ことでしようか。」

「五十七年の五月頃です」

「場所はどこですか。」

「やはり前と同じ中央自動車道を今度は
西の長野県の車山の方へ遊びに行く途中、
八ツ岳のふもとを走っていたときで、場

所はつきりしませんが、たぶん山梨県
の小淵沢インターチェンジの少し先だつ
たと思います」

「どんなふうにして気がついたんです
か。」

「この日は男性の友達の運転する車に私
と姉がいつしよに乗って走っていました。
また、もう一台いつしよに行った車が後
ろを走って走っていました。」

「ところが、目撃した現場へさしかかる
十分ぐらい前に今日はUFOが出そうだ
なという気がしたんです」

「あなたはUFOを目撃する前に、い
つもUFOが出そうなワイリングが起
こるのですか。」

「そうなんです。前にも父といつしよに
甲府の西の国道を走っていたとき、今日
はUFOが出そうだなという感じがしま
した。やはり十分ぐらい前にです」

「そのときもやはり出たんですか。」

「出ました。夕方でしたけれども、一瞬
オレンジ色の光がジグザグに動いてパツ
と消えたんです。父もUFOが出るとき
にはその前に感じたようですよ」

「UFOからあなたに何か送信されて
いるんでしょうか。そんな気はしません
でしたか。」

「さあ、わかりません」

「いずれにしてもあなたがテレバシー
の能力が他の人より高いということでは
ようね。」

「そうですね」

回転する楕円形のUFO

「先ほどの話に戻りますと、八ツ岳の
ふもとでUFOが出そうなワイリング
が起こつて空を見ていたんですか。」

「そうです。車の中から空を見ていたら
セスナ機が目に入ったんです。それでこ
のセスナ機を目で追つて見ていました。
そうしたら突然、変な形の物体が見えだ
したんです」

「どんな所を走っているときに出たん
ですか。」

「あのあたりは右手の八ツ岳の裾野にな
つてるところです。正面には北アルプ
スの連峰が見えていました。また左手の
方は少し開けて見晴らしのよいところ
です」

「そのときの天候は？」

「すごくよい天気で、ドライブには最適
の日でした」

「そのとき車はどっちの方向に走つて
いましたか。」

「西北の方向にむかつて走っていました。
そうしたら車の前の方の、やや左手の上
に見えたんです」

「変な形といえますと？」

「最初は大きな風船がバルーンじやない
かと思つたんですが、よく見ると違うん
です。金属的な物体でした。型は薬巻型
というのだと思いますが——」

「では細長い薬巻たばこのような形を
していたんですか。」

「いいえ、円盤型のベシヤツとしたよう
な形です」

このあと詳細な目撃体験を話されたが、
残念ながら本稿に収録しきれないので、
またの機会にゆずりたい。

アダムスキー型円盤、 超低空で出現！

清水 正



▲目撃者・渡辺隆氏夫妻

山形県南陽市赤湯にお住まいの渡辺隆さん(四一家三人はしばしばUFO目撃の体験をもち、またテレビ番組を予知力も持つという珍しい家族。母親の国井さく子さんは同市赤湯で「セブン」というスナックバーを経営し、娘さんの陽子さんは渡辺さんの奥さんで、国井さんとは実の親子。新婚の夢さめやらぬこの夫婦は母親の家に同居している。以下は電々公社に勤務する渡辺さんを主体にした三人の珍しい体験談である。聞き手は清水正レポーター。

——それではUFOを目撃した状況とか場所などをくわしく聞かせて下さい。

「本当は一人で話すよりもみんなで話すほうがいいんですが……。今居た人は母なんですけども一緒に見ているもんで……。一番最初に見たのは前に電話で話したときの天童の舞鶴公園。何月何日というのはちよつと覚えてないんですけども、冬なんです。おとしの冬、二月か三月です」とまず渡辺氏が説明する。

ここで奥さんの陽子さんが顔を出す。渡辺氏は図を描きながら説明を続ける。「舞鶴公園のこの辺に車をとめていたわけですよ。——こういう感じで見ていたんですよ」

——車に乗ってですか。

「車に乗ってて、角度としてはこのくらいかな」と奥さんにうながしながら手で図面をさし示す。

「星の話をしたな。あの辺は何とかの星座だなんて指さしたら、その所にU

F0がパツと出てきました」

——それは独身のときですか。

「独身です」

——デートで？

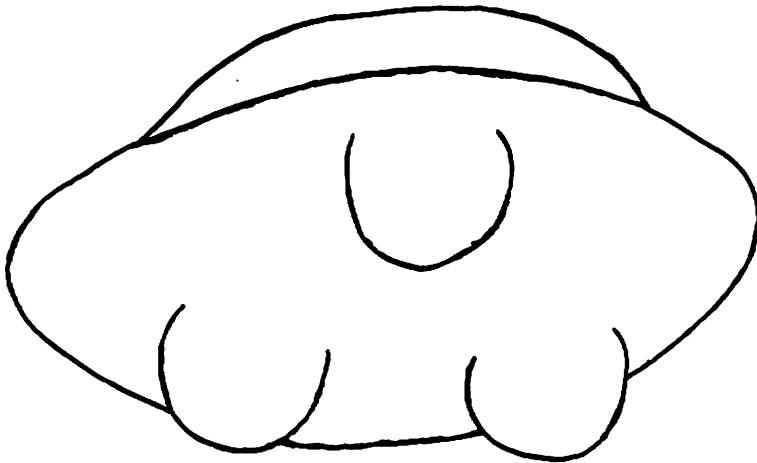
「そう、デート。俗にいうデートというやつで、かなり上の方にUFOが見えました(サンルーフの上の方)。見ると三つ出ていました。それが光っているんだな」と奥さんに聞きながら、「三色だなあ。そしてクルクル回ってんだあ。上の

方は銀色に光ってハッキリわからないんだけど、これだけはハッキリ色が赤と青とあったなあ」

「なんか信号機みたいだった」と奥さん。「これがクルクル回って、動きがクククとなったり、こう、なんか普通の飛行物体はスーッと速いという感じがするんだけど、速いんだか遅いんだかわかんねんだな、フワフワって——」

「下の部分がゆっくり動いている割に動

図 1



▲昭和56年2月のある日、山形県天童市舞鶴公園で午後7:00頃？
結婚前2人で目撃。(渡辺隆氏画)

「星を見ていたら視界に突然あらわれた。三色のボールのようなものがゆっくり回転していた。はっきり見えた。その物体は左から右へ移動し、北へ向かって飛んで行き、そして消えた。大体30秒は見ていたと思う。月がきれいに見えていた。物体は月よりも大きくて、複雑な動きを示していた」

きが速い——。やあ、いるわ、いるわつて」と奥さんがつけ加える。

回転する球型着陸装置

——何秒間ぐらい見てたんですか。

「三十秒間ぐらい見てたなあ」

——サンプルの視界の間で、端から端まで見てですか。

「いや、ずーっと前の方に……。なんだあれは。あれはアダムスキー型だとかなんだか言つて興奮して……。なにせ初めて見たからね。前から見たい見たいとは思つていただけ」

——見かけ上何センチぐらいですか。

「いやあ、かなり大きかったなあ」と渡辺氏は両手で示しながら、

「けつこう大きかったなあ。今まで見たUFOのなかでは一番大きかった」

「かなり近かった」と奥さん。

「だつて目の前に出てくるんだもんなあ、バツとなあ」

「ちようど、その辺の星がどうのこうのつて……。私は最初なんだかわかんなくて、ああ見てみると言われて、よく見たら、ああびつくりしたわ」

「何かいいことあるのかなあと思つたです（一同笑う）」

——結婚されたのはいつですか。

「昨年四月です」

——お子さんはいつ生まれたんですか。

「十日前です」と奥さんがうれしそうに答える。アダムスキーの円盤写真を見せると、渡辺氏がいきおいづいた。

「ああこれだね。ここはちよつとわかん

なんだけれども」と言つて円盤底部の中央の出っぱりを指さす。球型着陸装置を見て「この辺がもう少し大きかったんだ。光つてたからなあ。大きく見えたり、輪郭はさつき描いたようにこの写真と同じです。冷静に見れば見えぬものなあ。全体がポーツと光つてんだなあ。そして下が回転していたわけだ。この三つのタマが——。あんな動きは本当に口で説明してもわかんねえもんなあ」

と言いつつ渡辺氏は円盤が飛ぶ様子を描く。奥さんとご主人との対話になる。

「消えた所が木とか何とか、そういうのがなくて星がまわりに見えたから——」

「天気、いがつたんだ、すごく」

「それで、あつ消えたと言つてね。物陰に隠れて見えなくなつたんじゃないか」

「一人だと信憑性ないけど、二人だと何とかなる」といつて二人で笑う。

「これ言うと信じてくれる人と笑う人があるのよ。私なんか会社で言つたら一番最初に笑われたよ。また冗談で言つてるんだつて」

——手にとるような高さでしたか？

「近かつたな、たしかに！」と渡辺氏が力をこめる。

「近いけど、遠いような気もしたけど」

「あんなにハッキリ見えるものかなあと思つたしね。それで気が動転したんだ。とにかく大きかつたなあ」

——中に乗っているのは何だと思えますか。

渡辺氏が答えた。

「やつぱり宇宙人というか、よくテレビ

でやってるね。それしか考えられないと思うけど。この世の人類がちよつと作れそうにないし、あの動き方がいい、そのときバツと出てきてバツと消えること自体、なんか今の科学じゃできないんじゃないかという観点からいけば、やつぱりもつともつと別な星の生物が来ているんじゃないかと——」

「見る前からUFO信じていたの？」

と奥さんが念を押す。

「うん、信じていた。UFOは信じている人にしか出ないんでねえかと思うんだ（一同笑う）。ハッキリ言つて絶対だと思つて」

皆既月食の夜に出現！

「それからなのね、空をよく見るようになったのは」

「星が好きだから、サツと見るクセあるんだよね。で、その後三回見た」

「私とお母さんと見たのは——」

「三人で見たのは二回。おとしの暮れに見たのは二回目、皆既月食で、ここ

だちゅうんで、三人で外に出て、それで母がUFOでも出ねえがなあと言つてたんですよ。そうしたら、そこにポーツと

出てきたんですよ。びつくりしたな。お月さまがあつて、前の家の屋根があつてアンテナがあるんですよ。そのアンテナ

のまん中辺に出たんですよ。

おれには長ひよろく見えただ。みんなはそれぞれ違ふんだなあ。三人三様その形がね。

おれは長ひよろいような、ハッキリと

しないグレースっぽいというか、にぶいような、ハッキリ形が、その、つかめなかつたんですよ。それが南から東へ飛んだな」

先に見た円盤の絵を指さしながら、

「これより大きくないけども、もう少し横に長くなかつたか？」

奥さんが発言する。

「私は長ひよろいというよりも楕円形かカブセルみたいに見えた」

「三人三様違ふんだ。そのあとおれがチヨコチヨコ畑に登つてなんか見たんですけど、それは丸っこくしか見えなかつたけれども、これがけつこう速いスピードで

ね。これはおれだけしか見えなかつた。二台飛んでいたよ。あれが行つてすぐ！」

渡辺氏は自動車みたいに二台と云う。ここでお母さんのさく子さんが姿を現して渡辺氏の話を聞いている。

UFOを追いかける

——去年目撃したものがありませんか。

「去年見たのは、このあいだ電話でもしやべつたことなだけけど、局（電々公社）の後輩と酒飲みがあつて、羽黒荘という

所なんですけども、そのときにもすごく天気よくて、お月さまがまん丸で、それ

を見上げながら歩いてたわけですよ。

そしたらこの辺にポツンとちつちやな明りが見えたもんで、星かなと思つたんだけども、ずーっと見ているうち、これが動きだして、この動きもやつぱりUFOの動きなんです。独特の光でキラキラ

キラキラ光つてたんだ、ものすごく！」

「だつて私、呼吸止めたんだもん。あのとき、あーって声も出なかつた(一同笑う)。だまーって見てだがらね。みんなしばらくだまーって、消えたときに、初めて、なんだあれは?と言つたもん。」

それから、もうちよつとしたら消えたとこより、もうちよつとさがつた所にもう一回、パツと出たの。あとスーツとあつちへ消えていったがら、私、急いで家の前で見たがらね。道路に追いかけて行つたけど見えなかつた。

二回目のときは、なんとなく下に来たのがちよつちやいような気がしたのね。まず最初ね、星見てたんだから、月食だつて見てたのね。そして、それ早く消えろ早く消えろなんて言つたら、そこへこれがパツと出たわけだ。

あーつと言つた瞬間、消えちやつたでしょう。で、しばらくしたら、この辺に下になつた所にね、これよりちよつちやく見えた。最後のときはびつくりした。私、初めてだから、あのときは興奮したね。年がいてもなくね。

でも道路に出たら、その前の加藤洋服屋さんのね、おじいちゃん達の孫なのが天体望遠鏡で空をながめてたわけよ。その人たち何も騒がないでいるのに、私、年がいてもなく、わーつなんて言つたらおかしく思われるもんだから、静かにしたほうがいいと思つて、まだもどつてきて、三人で話して、興奮してだね。

私、UFOをすごく信じてんのね、もう。だから夜お店開いてて、お客さん、いらつしやつてつとときにね、こつちでは、よくやるでしょう、テレビなどでア

メリカどか、いろんな国の人たちがUFO見たというの、あれ見たくて、お店でお客さん早く帰らねえがなあって。今日はお客さん来ない方がいいと思うと、そういう日に限つて来んのね。」

「映像としてハッキリとらえて、それをテレビに流せば最高なんだけど」と渡辺氏。

呼びかけに応じた?

「出現した物体から何かの意志のようなものを感じましたか。気持のような。」

答えたのはお母さん。

「ああ、あのUFO出る前ね、月食見ただでしよう。そんなとき私がね、何の気なしにふざけてよ、月食なかなか消えないんで、この辺にUFO出ないかなあ、なんて言つたんだよね。そして少しつたら出たんだよね、すぐ出たよ。」

「人が来てもそういうふうには言わないほうがいいよ」と渡辺氏が牽制する。

「それは言わないよ。」

「あの家族おかしいつて言われつからね」と渡辺氏はさらに念を押す。

「そう、あの親子おかしいよと絶対言われるもんね。」

「おかしいと言われれば、おかしいけど」と渡辺氏が言うので一同大笑いする。

「そうするとタイミングがすくいいわけですね。出てくる側の意欲みたいなものが働いているということも考えられますね。」

「だから私思つただけど」とお母さんが続けて、「私が靈感強いつてことはい

つもお客さんも認めてんの。だけどこれは靈感とは違つて、と思うのね。だから強いのはこつちじゃないかと」と言つて渡辺氏の方を指さす。どうやらテレビシク能力を「靈感」と言つていられるらしい。

渡辺氏が意見を出した。

「おれは星が好きだから、しよつちゆう空を見んのね。UFOは、出るぞと意識しないで見たときしか出ないんだ。出ないというか見えないんだ。出ねえがなあと思うとダメなんだ。なにげなくスツと見たときにパツと出てるわけ。アレと思つてると、どんどろ、どんどろ、どんどろ、どんどろつて動く。それで追つかけて行くわけ。家に帰らず——」一同笑う。お母さんが口を出した。

「もつとこつちべつたらこいなあ、こつちうふうに、こんなまんじゅうみたいではなく、ベターツとして、ポツポツポツで、私これ見たから絶対だと思つたよ。月がもう消えそうなとき、見えたんだから。」

「私はこういうのは見えなかつた」とお母さんが図の外周点状を見ながら言う。

外縁部の光球群が回転

「私はちゃんと見えたんだもん。こつちパカーツと、その回りにずーつとポツポツポツポツと、ここんとこが(と図に描いた円盤の外周のランプのように沢山並んだ光を指さしながら、このオレンジ色の光がグルーツと回つてんのよ。そしてスーッと横に動いだから絶対だと思つたわ

け。

そして外に走つて二回目に出たとき追いかけたら、ちよつと向かいで望遠鏡で見つたがら、あの人が(と娘ムコを指さしながら)空見てんのに、望遠鏡で見たのに見えないんだもの、やっぱり大つきい声だせないなあと思つて、もどつてきたんだよね。みんなの所に」

「その日、けつこう見た人がいるんでねえがど思うんだけどね。この日は月食だつたからね」と渡辺氏。

「そう、いつだかわかんないんじゃないかとハッキリしてんだもんね。何時頃だつたか?」

「さあ、メシ食う前なんが——。お店にはお客が来ていながつた。」

「うん、今日みだいな日だつた。そしてら春日さんがそこへ来たのよ。興奮しているうちに。そして何しつたなあって、寒いのに三人で何しつたのなんてニヤニヤしているのね。電話局の人よ。友達なの。(声を小さくして)「今よ、見たなよ」「ああ」なんてね。「もう一回出ないかなあ」なんてね。春日さんね。」

あんときは興奮してだがら、そのあと人に話すときはちよつと省略してね。バカ騒ぎしてつと、「何あそこの家、親子三人は」なんて人が言うものね。」

「でも一人で見たつちゆうより、三人で見た、二人で見たというのが相手も納得するし、自分は間違いないということが聞く人にもわかるんだね。一人で言つていのは絶対信用できないからね。なんぼでも作らんだがら。こんなもの想像力の世界で、想像が高まればなんぼだつ

て言えるもんね。だいたいテレビでやっているでしょう。あれをこう頭に入れておぼね」

「だってこれ私、テレビで見たのとそっくりだったよ」とお母さんが言う。

「だから三人で見た、二人で見たっていうのはやっぱり若干見方が変わってくるけれども」

「わたし絶対信じてんのね。私はもう絶対」とお母さんが断言する。

「見れば信じる、やっぱり」と渡辺氏が強調する。

宇宙人の飛来か

——乗っているのは宇宙人だと思いますか？

答えたのはお母さん。「そこまで言われつとなあ。でも今の時代はソビエトもアメリカでもいろいろ研究してね、ロケット打ち上げでるでしょう。だから秘密にしてどつかの国が秘密のものを打ち上げてるかもしれないと思うし」。でもなんとなく、これだけはやっぱり、よその星から来ているような気はするね」

「人工衛星だとね、まっすぐビュッと一定速度でね、水平にこう行つたらね。あれは何回も見でっから」と渡辺氏。

「でしよう。それがパッと消えてよ。もうちょっと下にポッと出るといいうのは絶対もうUFO以外にないと思う」

「動きが速うね、動きが——」
「だって息をのんでるまに消えて、また下にポッと出るなんていうことは、どんなに科学が発達してもね」。グルグル

軌道に乗ってね、回んのはわかる。だけどパッと空にあれだけね」

「あれは違うUFOでねえが？ 二回目やつ。最初出てきたやつでなくて別なやつ」

「形も違うし大きさも違ったね。二回目に見たのは」とお母さんが断言しながら、「こんなにはハッキリしてないのね。でも私は同じのがもう一回現れたんだと思つた、そのときは——」

「パッと現れて、パッと消えるというのがね」と渡辺氏。

お母さんは楽しそうに語り続ける。「そしてなんていうかなあ、バカにしないよ。うな、信じてるようなお客さん見るとね、私しやべつちやうのよね」

「おれもしやべるほうだものなあ。局で人見るとだいぶしやべつたものなあ」

「おそろくわが家は、みんなからおかしいなと思われて——」

「でも信じてる人、けつこういるからね」と渡辺氏がお母さんをなぐさめる。

これにいきおいを得てお母さんが続ける。「あの頃、山形よりむこうの人たちがね、あの時期UFO見た人多いんだって。店にいらつしやつたお客さんで、ものすごく見たい人がいた。その友達が神戸のほうにいらつしやるんだって。その方が月の何日の日だかUFOが必ず出るんですつて」

店に来客があつてお母さんが出て行く。

——生まれて初めてUFOを見たのは二人で見たのですか。
「そうです。本当にロマンチックなんだ

なあ」と渡辺氏は笑う。

「かなり興奮してたね」とお母さん。
「そう、興奮したね、あのときは——」
「何日もね」

テレバシーのすこいお母さん

——テレバシーに関しては何のように思われますか。

「そうだな、テレバシーはあると思うんだけど、よほど、そのなんちゆうかな、精神的によほど卓越した状態にならないと、なんかそういうのが対応できないちゆうか、そういう感じがすんだけんども、あるとは思うよ。ただ凡人にその能力がないし、そういう能力を生むようなものも何もしないよ。そんなような気がするんだけれどね。目に見えないようなもんでもないしね」と渡辺氏。

——テレバシーの例がありますか。
「あの人（お母さん）はやっぱりテレバシーある感じじゃないかなあ。それがテレバシーちゆうのかどうかわかんねけんども、パッとひらめくんだよ」

あの人（お母さん）は洗い物なんかしていてパッとひらめくんだそう。店に来るお客さんの顔を思い浮かべて、「あの人、どうしてるかなあ」なんて思つたりすると、その人が必ず店に来るそう。だね。

店で商売してで、なにげなく無意識にあるお客さんの話をパッと出すと、すぐ来るちゆうか、とにかくあの人はすこいんだよ。

おれが言うのはなんだけど、しやべつていっているうちに目の前にパッと相手が来て

いるんだから、そういう面ではテレバシーあるんじゃないかなあと思うんだ。
——お母さんの勘がすこいんですか。
「すこい。すこいね」

——人を見抜く力があるんですか。

「見抜く力はないんでねえがなあ。人にだまされるほうだからなあ。だまされるちゆうか、人がいいんだね。人を見抜くちゆうのはいないけども、無意識の状態でパッとひらめいたのが現実になっているとか、そんなことがかなりあるみたいだ。夢なんかでもパッと見たのがそのとおりになっているちゆうか、今までもかなりあつたちゆうから——。そういう面ではあの人のテレバシーあんのかなあ、やっぱり。

テレバシーちゆうのはなんかく送る人がバババとやんのがテレバシーだと思うんだけども——。たとえば店に来るお客さんが「今日はセブンに行くんだ」と思つたときにビビッと、こつちにパッと感じるちゆうのがテレバシーといえればテレバシーかもしれないですね。

頭で考えながら「行くぞ、行くぞ、行くぞ、セブンのママ行くぞ」と思うんじゃないかと、セブン行つてみつかあ」とパッと思つたときに、こつちでファツと感じるちゆうのがテレバシーね。そういう意味で言えは、あのママはアンテナがすこいんだね。すこいテレバシーだね」

奥さんもテレバシーがすこいかった

奥さんがもどつて来て口をはさむ。

「私もいつときテレパシーが——」
 「うん、おまえもすこかったよなあ」
 「あの頃は神経が高ぶってたというのか、電話が鳴る前に電話が来るというのがわかるというのか、「あつ、お母さん、いま電話来るから」って言うと、「なに、電話なんか鳴ってないじゃない」と言ってるうちにすぐリンリンと鳴るの」
 ——今もテレパシーでわかるんですか。
 「わかった時期があつたんです。でもテレパシーをおこすと、すごく疲れて、へとへとになりました」と奥さんが意外なことを言う。
 ——なぜ疲れるんですか。
 「理由はよくわかりませんが、すごく神経を使うからでしょう」
 ——それはいつ頃のことですか。
 「結婚する前です。高校のときもだし、結婚する二年ぐらい前の春頃、四月か五月頃、高橋さんというおじいちゃんがいる、その人が歩いて来るといのがなるとなくわかって、「お母さん、今日は高橋さん来るよ」と言ったら、すぐ「こんにちは」つて来たもんだから、うちのお母さんびつくりして、私もそんなにわかるのが気持わるいほどでした。お母さんも「洋子、そんなに自分でイライラしたりなんかすると疲れるから、気使わないように」なんて言っていました。
 でも自分で気持わるいくらいにいろいろなことがわかるんです。それからなるべく考えないようにしていました」
 ——という、あなたとお母さんの親子がテレパシー現象が多かったのですか。
 「最近ではそうでもありません。でも、

しゃべっていて話題にした人たちがその順序どおりに来たときは気持わるかった」
 「きびわいくなるね、ハッキリ言つて」と渡辺氏が同情する。
 「言つた本人も気味わるいし、まわりにいる人もゾツとするのね。でも、もうそんなことには慣れたでしょ？」とご主人を見る。
 「ああ慣れた。とんでもねえ所きたと思つたっけ」と入りムコの渡辺氏が述懐して、「でも前からそんな状態は知つてたけど、結婚する前からテレパシー親子つちゆうことは知つてだよ。この店には十年ぐらい飲みに通つたっけがらね。これは実家が福島で、こつち（赤湯）に最初から就職して電話局に勤めながら、この店に通つてたわけだね。だからこの親子が勤するどいつていうのはだいたい知つてたんだ。本当にするどかつたよ」
 以上は今年三月十五日の夜、温泉地・赤湯の渡辺氏宅で一時間取材した記録である。生まれたばかりの赤ちゃんを加えて四人家族で、皆さんはともあたたかい人柄であり、楽しく談笑することができた。三人ともUFO問題に非常な関心を示しており、またテレパシクな能力の持主であることもわかった。筆者はアダムスキー問題を話したが、これにたいしてもよく理解された。テレパシー現象についてはまだ面白い話が沢山あるらしい。
 三人とも純粋な方で、自分たちの目撃した物を他人に理解させようとして一生懸命に話されるが、そこにはユーモアも

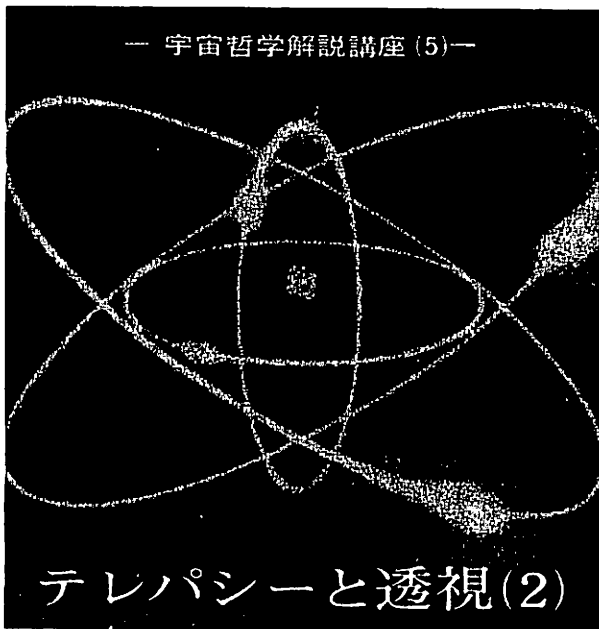
▼渡辺氏夫妻とお母さん。



あつて、きわめてなごやかな雰囲気込まれてきた。現実感を出すために土地の

方首そのままに記録した点を承された

— 宇宙哲学解説講座(5) —



テレパシーと透視(2)

(日本GAP会長)

久保田八郎

す。私たちの身近にある手帳、消しゴム、糊、砂糖などには炭素、水素、酸素などが入っていますし、人体の維持に不可欠な水という液体は酸素原子一個に水素原子二個がくっついて分子を構成し、これらが無数に集まって可視的な水という物質を構成することはだれでも知っていることです。

背後の英知までは考えない

ところが現代の学校における科学教育では、人体をはじめとする万物の構成要素は原子・分子であると教えるだけで、それ以上の不可思議な現象について驚異の心を起こさせようとはしません。つまり現代の教育を受けた人は、あらゆる現象を偶然の結果であるとみなすように仕込まれてしまい、原子や分子が存在せしめていた未知の「英知」といったものまでは考えないような人間に仕立て上げられています。

酸素一原子と水素二原子が結合して水を造ったり、酸素二原子と水素二原子とで過酸化水素を造ったりする理由は、原子価すなわち総合能力の概念で解決されましたが、しかしこの総合能力がどのようになっているのかという謎の奥の奥までは考えられていません。ブドウ糖と果糖はともに六個の炭素原子、十二個の水素原子、六個の酸素原子からできています。このように元素の数が同じであっても、その集合の仕方によって異なる化合物ができるのですが、この配置の妙を考えた出したものと青写真がどこに存在す

るのかということまでは、現代の科学では考えないのが普通です。科学者は、ただ何と何が結合して、これこれの化合物ができるという事実を客観的に観察し、事務的に処理しているだけです。

宇宙で分離した物はない

元の話に戻りましょう。いま私たちに重要なのは、この万物を支配する英知、すなわちアダムスキーの言う宇宙の意識を認識することですが、それよりも万物がわずかに八十八種類の自然元素の組み合わせによって出来ているという事実です。だから万物は一体なのです。それはあたかもわずかに二十六文字を自由自在に組み合わせる数万の言葉ができる英単語に似ています。したがって、いかなる英単語といえども本質的にはみな一体です。

以上のとおり、物質の根源的な要素があらゆる形態の形成に流用されているという事実を知れば、その意味において万物に分離したものはないということになります。庭をほう小さな虫、ころがっている古いバケツ、土、草花、樹木、その他、目に見えるあらゆる物が極微の世界においては不可分の関係にあるのです。

原子はどれも基本的には同じ内部構造をもっており、陽子、中性子、電子は、どの原子のものでも共通の性質を帯びています。ある元素の原子と他の元素の原子とは、陽子と電子の数が違うだけで、したがって固体、液体、気体を問わず、ある元素を元素たらしめているのは、この数の違いにすぎません。そして地球上

万物は原子で出来ている

前回は「自分によって見られる物はすべて自分自身である」というフィリングを起すことによって万物一体感を高揚させることがテレパシー開発の基本となる旨を述べました。

しかしこのようなフィリングを起すのは困難だという人が多いようで、特に人間のような肉体をもつ生命体と無機物の物質との一体感はどうしても起らないという人があるようです。

これについては万物を構成する物質の

基本的なもの、すなわち原子、分子のとき極微の世界に着目するとよいのです。

今日、あらゆる形態が同じ基礎的実体つまり原子から造られていることは小学生でも知っています。そして目につく限りの無数の物は、その形や外観のいかんにかかわらず、わずかに八十八種類の自然元素の複合体からできているにすぎないという事実は驚くべき事であるにもかかわらず、もっと驚くべきことは、こうした知識をもつ人間のほとんどだれ一人として、この元素の組み合わせに際して背後にある宇宙的な力または英知が働いていることを考えようとしなない点にあります。

で見い出される元素は、はるかな遠い宇宙空間でも発見されていますから、結局、宇宙は一体であるといえるでしょう。

宇宙の英知はどこでも作用する

同じものがどこにもあるから一体であるという考え方は不可とする学者がいるかもしれませんが、私たちが万物一体感を起こすのに、あまりに複雑にむつかしく考えすぎますと、かえって混乱が生じて、ついには万物は分裂だらけという逆な想念を起こしかねませんから注意する必要があります。

問題は個別の形態ではなくて、形態を存在せしめている材料としての極微の物質を宇宙空間に造り出している「何か」です。ここまで思いを寄せないことには人間は向上しないでしょう。なぜなら酸素原子一個にびたりとくっついている二個の水素原子は互いに争うことはなく、調和したままの状態の水の分子を形成しているのですが、この関係においては昔も悪もなく、ただ宇宙的な法則と秩序に従っているだけであり、このことが人間に調和の示唆を与えるからです。

しかもこの法則と秩序が宇宙空間に充満していることは、メンデレーエフの元素周期律表に集められた元素でもって遠い星ができていることを天文学者が強力な望遠鏡と分光写真機で解明していることとわかります。数十億光年かなたの星から来る光のスペクトルは、これらの星もなんのことはない地球上で見られるのと同じ水素やヘリウム、その他の元素を

含んでいるというのですから、地球上の物質を研究することは、宇宙を構成しているのと同じ物質を扱うことになると言えます。ということはこれらの元素に含まれる原子群の従う法則と秩序は、宇宙のどこにも存在するものだという事になります。星によつては倍じられないほどの密度に圧縮されたり、数百万度に熱せられるという地球とは全く異なる条件下で存在するものもあるでしょうが、しかしその遠い星でも地上でも元素は同じものなのです。だから万物は一体です。同じ元素を遠い宇宙空間の星に存在せしめる「宇宙的な英知」は地球上で万物を存在せしめている英知と同じものであるはずですから、つまるところ宇宙は同じ英知、すなわちただ一つの英知で支配されているということになります。

秩序の流れとは英知を意味する

この「宇宙的な英知」というものを計算によつて明確に数式化したり、物質の一つとして存在を指摘したりすることができないために、英知なるものの存在を云々することは学者間でタブーになっていると思えますが、ノーベル賞授賞者で名高いドイツの物理学者エルヴィン・シュレーディンガーはその名著「生命とは何か」の中で、次のように述べています。

「生物体が「秩序の流れ」を自分自身に集中させることによつて、崩壊して原子的な混沌状態になつてゆくのをまぬがれるという生物体にそなわつた驚くべき天赋の能力、すなわち適当な環境の中から

「秩序を吸い込む」という天分は「非周期性固体」と呼ぶべき染色体分子の存在と切り離せない結びつきがあるように思われます。それは疑いもなく、秩序のどのつた原子結合体の中でもわれわれの知る限り最も高度のものであり、その中であらゆる原子やあらゆる化学基が、それぞれ独自の役割を演じているということによつて、普通の周期性結晶よりもはるかに高級なものです」(岩波新書)

ここでは人体のごとき生物体に見られる不可思議さやまじない「秩序の流れ」というものに言及していますが、これは要するに宇宙の英知の意味にはかならないと思われまふ。つまりアダムスキーの言う宇宙の意識です。英知といえは人格的な響があるために「秩序の流れ」と表現したのでしよう。

いずれにせよ偉大な科学者でこの英知なるものに気付いていた人はいるわけです。ただこの点をあまりに強調すると宗教的だとのそりをまぬがれ得ないために、学者は表現の仕方がきわめて慎重です。

ただしフランスの大生物学者アレキシス・カレルのごとく、ルールドにおける奇跡を目撃して、後にカトリック信者になつた学者もいますが、この記事における筆者の論説は宗教とは一切関係ありません。

徹視的に見ればよい

さて、テレパシーの開発においては万物一体感が基本になるとアダムスキーは

何度も著書「テレパシー開発法」や「生命の科学」(以上アダムスキー全集第五、六巻)で述べていますが、このフィードバックを起すことが困難だという人は、きわめて大ざっぱながらも右に述べた極微の世界の神秘性と不可思議さを考えれば、容易に納得し、万物一体感の高揚の契機になると思ひます。

私たちは外界の物体を見るのに肉眼による外形しか知覚しませんが、これをもつと徹視的に見たとすれば、あらゆる物がすべて原子のかたまりにしか見え、しかも生物にはシュレーディンガーの言う「秩序の流れ」が充満している様子がわかるでしょう。言いかえれば、生命体の世界は「秩序の流れ」の世界そのものであり、偶然性やたまたまの入り込む余地はありません。すなわちミクロの世界では善悪、闘争、賢愚などは存在せず、あるのは調和のみです。これはたんなる哲学的な観念論ではなく、原子物理学の大学者であるシュレーディンガーの解説そのものです。彼は言っています。

「一個の生物体の一生の中で繰り返られる出来事は、生命をもたないものの中であれわれが出会ういかなるものも遠く及ばない。実に感嘆すべき規則性と秩序とを表現しています」

このことを考えれば、われわれ人間が他人を個々の分離したもののみなし、無生物である物体に何の関心も起こさぬという態度がいかに低次なものであるかということに気づきます。庭先をはいまわる小さな虫一匹も、隅にころがっている壊れたブリキのバケツも、それを見つめ

る自分も、すべてミクロの世界では一体なのであり、これらは法則にもとづいて原子を配列せしめている宇宙的な英知を一様に宿しています。

万物を自分自身のごとくに見る

ここで、問題は！ 私たちが万物一体感を起すことというのは、その宇宙の英知の世界を認識してその世界へ返つてゆくことであつて、これこそ人間が宇宙的に成長するための最重要な段階であり、またテレパシー、透視力などの開発に不可欠な要素となるものです。

具体的に言いますと、「生命の科学」(アダムスキー全集第六巻)にありますように、自分によつて見られる物体は何であらうと、それがあたかも自分自身であるかのごとく、その物体について意識的になるのです。

パケツには生物体のごとく「秩序の流れ」を吸収する力はありませんが、それを造り上げている原子群には、生命体に「秩序と規則性」を与えているのと同じ英知が宿つており、その元素は人間に利用されるのを待っています。この場合、無生物を構成する元素類は「奉仕する」のだとアダムスキーはよく表現しています。この「奉仕」という言葉が宗教的な響きをもつというのなら、もはやこのような問題を論じる余地はありません。宗教を抜きにしても「奉仕」というのは美しい言葉で、それは宇宙的な何かをあらわしています。

さて、私たちが万物を観察するとき、

それがすべて自分自身であるというフィリリングを高めると、万物が輝いて見えるようになります。そしてあらゆる物が自分の身体と同じように、かけがえのない大切なものであるというフィリリングが起りますと、茶わん一個、ハシ一本にいたるまで、いとくして仕方がないという気分になります。このフィリリングこそ進化した偉大な惑星の人たちが常時起こしているもので、テレパシーの開発に最重要なキイになると思われまうので、今年各地の支部大会でこの点を強調しました。

たしかに地球人の想念は分裂に満ちていて、万物一体感どころか、人間同士には不信、不和、憎悪、嫌悪などがはびこつており、人生は闘争の場と化しています。しかしそれは人間のセンス・マインド(感覚器官の心)から出る仮の現象であつて、絶対的なものではありません。センス・マインドは肉体の死とともに消えるものであつて、永続するものではありません。これがきわめて気まぐれなものであることは、さつきまで泣きわめいていた子供が何かの拍子にゲラゲラ笑い出すこともわかります。大人でも同様で、愛が憎悪に変わり、その逆もあり得るのです。こんなに変化しやすい人間のマインドを絶対視している限り、人間の世界に平和と調和は実現しないでしやう。

だれもが同じ空気を吸っている

ところが人間は差別することが大好き

です。利口な人は知能の低い人をバカにし、知能の低い人は利口な人を嫉妬し、金持ちは貧乏人をあざ笑ひ、貧乏人は金持ちに反感し、自由主義者は共産主義者をのしり、共産主義者は自由主義者をアメリカの犬だときめつけたりします。しかしこんなに反目しあつている人間にも共通点があります。それは生命を与えられているという事実です。そしてだれもが一樣に同じ空気を吸って生きているという事実です。

ガリレイが、物質であり重量をもつことを発見し、ゲーリケが人間の生命維持に重要な役割を果たすことを実証した、窒素四容積と酸素一容積その他の雑多な元素類から成る空気なるものも、つまるところは分子の流れですが、ここにも宇宙の英知による法則が厳然と働いていることを考へて空気を吸っている人はまづいないでしやう。これは惑星を取り巻いている「神の息」ともいうべきものですが、この恩恵を知覚して生きている人間もないでしやう。

もし人間のすべてが空気のもつ旨いしれぬ重要さを認識して、この恩恵にあらためて驚喜するならば、人間同士の不和がいかに非宇宙的なものであるかを強く感じるようになるでしやう。

ミクロの世界を見習う

要するに人間は自然界の法則に従えばよいのです。というよりも法則に従つた極微の世界を見習えばよいというほうが適切でしやう。もつともハイゼンベルク

の不確定性原理のごとく、いかなる粒子といえどもそれを追跡する完全に正確な方法はありません。ともいえるので、物質が粒子でもあり波動でもあるという二面性を考えれば、法則といつても簡単に規定することはできないのでしやうが、私たちは物理学者ではないので、前述のごとくあまりむづかしく考える必要はなく、原子・分子の結合によつて物質ができるのだという程度の知識だけでも宇宙的な「法則」なるものの存在を把握することはできるはずで

す。端的に言いますと、どんなに嫌いな人がやつてきても、「相手は原子のかたまひだ」と考えればよいのです。相手の肉体を構成する原子・分子群は、こちらのセンス・マインドによる好き嫌いには関係なしに規則と秩序に従つて人体を形成しては生かす仕事を続けています。そしてやはり全身には宇宙的な英知が充満しています。

こう考えれば、私たちは宇宙の英知の充満する空間の中に存在しているので、分離しているものは何もなく、何物にたいしても非難すべきカケラもないことが、觀念としてでなく、実感としてわいてくるのです。

自分をどんなにひどく罵倒する人がいても、その罵詈雑言は実は相手の肉体内の原子・分子を凝集せしめている英知から出たものではなく、肉体に付随する一時的なセンス・マインドから出たものであることは、想念や心のメカニズムの実体が不明であるにしても、まず間違はありませんから、気にならなくなりま

この世で創造されたものは、生物・無生物のいかに問はず何らかの目的を持ってはいるはずですから、そのことを考えれば、他の個体の存在を否定するのは宇宙的にみて間違いだといえます。むしろその目的が達成されるように万物を祝福するべきでしょう。祝福というときもまたも宗教的だといって非難する人が出てくるかもしれませんが、どんなに言葉を探しても、これ以上に適切な言葉は見当たりにませんので、いっそ堂々と「祝福」という言葉を使用することにします。

敏感な人間になる

テレパシー現象の発現には、それなりのトレーニングが必要で、詳細はアダムスキーの名著「テレパシー開発法」に述べてありますから、それをお読み下さい。本稿では万物一体感の高揚が困難だという人のために、簡単な原子物理学を少し導入して、万物が一体である理由を述べてみました。

このようにして万物一体感を極端に押しすすめて、他人が我が、我が他人かという境地に達しますと、テレパシー現象が発現します。ただし具体的には常に自分の想念を観察し、センス・マインドを静めて、内部の「宇宙の意識」から来る印象に耳を傾けるトレーニングを行う必要があります。あるいは気の合った親しい友人とテレパシーの練習を行い、テレパシクな感知力を高めるクセをつけるようにします。そうすると自動車の運転練習と同様に、内在するテレパシー能力

が少しずつ出てきます。

テレパシー能力の発現とは敏感な人間になることです。これは間違いない人生を過ごすのに最も有力な武器となります。人間を仕事の上で成功させるものは学歴や技術よりもむしろ直感的なひらめきです。高度な学歴があっても、この直感的ひらめきの乏しい人がありますし、乏しいがゆえに学問的知識で補う必要があるのでしょうか。学歴はなくても非常に直感力のある人もあります。こうした人は「こまかい事によく気がつき、他人の気持を敏感に察する人」といわれます。こういうタイプの人が成功するのです。

万物一体感と信念と祝福

たびたび詳述しましたように、望ましい物事を実現させるのに「必ず実現する」というミラクル・ワード（奇跡を起こす言葉）の反覆思念と、すでに実現してしまつたイメージを描くイメージ法とを私たちは応用して多大の成果をあげてきました。その場合でも、いまままでに述べた万物一体感を強く起こして、これを土台にして、その上で右の反覆思念とイメージ法を応用すれば驚異的な成果があらわれます。

それは自分自身を孤立した個体でなしに、全体の中に融合した一部分とみて強烈な想念を発するのですから、それだけに信念も強烈になりますし、効果も大なるわけですね。

再度言いますと「宇宙空間に分離した

ものは何も無い」というフィーリングを概念論でなしに実感としてわき起こし、それを極端に高めるのです。そうするとまず自分の生活環境が急速に変化するのがわかります。もちろん良い方向に変化するものであって、悪くなるはずはありません。そして望ましい物事が次々と実現するようになります。

また自分自身の内部にも大きな変化が起こって、いわゆる超能力的な力が発現してきます。

したがって私たちに必要なのは、万物一体感の高揚を土台にした信念の力と万物に対する祝福感であつて、これ以外に必要なものは一切ありませんし、宗教や心霊その他にすることが必要ありません。人間の不運には悪霊がついているからだとか、高級な守護霊を持つて、などというのは誤つた説ですから注意を要します。私たちが持たねばならぬのは、高級な宇宙的想念なのであつて、これだけでよいのです。これで勝負がきまります。まやかしの説は人間に必ず恐怖を植えつけますから、それでまやかしのことがわかります。

真剣に積極的に活動を続けよう

地球へ来て、ひそかに地球人を援助しておられる偉大な惑星の方々は、万物一体感が私たち地球人の想像を絶した高度なレベルにまで昇華しているものように、こうした事実を地球人は全く知りません。

しかし現実の世界の裏面で行われてい

る驚異的な物事は、地球人の無知無感とは関係なしに、あるプログラムにそつて進行しています。太陽系の地球を含む惑星は全部で十二個あることや、そのいづれにも人間が存在して高度な文明が発達していることは、すでにアダムスキーが「宇宙からの訪問者」(アダムスキー全集第一巻)その他の著書で述べていますが、これをどんなに嘲笑し、否定する人がいようと、その人々には関係なしに、この地球上にひそかに在任して活動している異星人の存在を筆者は知っています。だがどのようにあざけり笑つて無視しようとも、地球人を救済しようとして太陽系内の偉大な惑星から来たボランティアたちが地球にいるという事実は、筆者のGAP活動の推進に拍車をかけるものです。

また筆者はこの事実を信じようとしないう人にも無理やり信じさせようとするものはありません。信じてくれそうな人、話がわかってもらえそうな人だけでよいですから、熱心にGAP活動に協力しようという会員の方々は、そのような人に積極的に語りかけるか、アダムスキー全集または本誌を見せて、宇宙的に目覚めさせる努力を続けて下されば幸いです。真剣に行う人にたいしては、本人は気づかなくても必ずスペース・ビーブルの何らかの援助があるはずで、筆者はこのGAP活動を地球の平和運動の中心にしたいぐらいの気持をもっています。従来の宗教や道徳はもうだめです。別な惑星の偉大な文明と比較対照してこそ飛躍的な向上があるのです。(以下次号)



早く宇宙社会の仲間入りを 青森市 梅田純司

初めて手紙を寄せていただきました。私はつい最近日本GAPに入会した者です。書店で機関誌UFOコンタクティー83号をみつけたのがきっかけです。これも書店と契約の勞をとっていただいた会員の方のおかげと思っております。ありがとうございます。

アダムスキー全集は現在2巻まで読みました。私にとってはまるきり初めてのことで、ただただ驚くやら感動するやらで、とても興奮しています。アダムスキーという名はアダムスキー型円盤ということでしょうかとんと知りませんでしたので、もう少し早く体験記等を読んでいたらなあと思いました。

宇宙のことにはかなり以前から興味を持っておりまして、天体望遠鏡で天体観測もかなりやってきました。月面や木星、土星など、その他の星々を見ていると気が休まるんです。アダムスキー氏の本を読んだあと、なぜ自分は宇宙にあこがれるのか、わかったような気がします。また地球の宇宙探査の面でもバイオニア、バイキング、ボエジャー等の公式記事はかなり読んでいましたので、この太陽系で地球だけが唯一生物のいる惑星だと思っていましたし、現にどの本を見ても大抵は「地球は宇宙のオアシスだ」みたいなことを書いて

ていますよね。しかしこれからは明らかに自分の観測の姿勢も変わっていくでしょう。

地球の人間がすぐ隣の友人たちの存在に気づき、学び、宇宙社会の仲間入りをするまでには、かなりの（早くあつてほしいが）時間を必要とするでしょう。先生やその他の諸会員の方々にくらべれば、はるかにうしろを歩いている（歩き始めたといつてもよいのですが）私ですが、少しづつでも力になりたいと思っております。これからもよろしくお願ひいたします。

GAPに復帰した喜び 千葉県 山田克己

久保田先生、日本GAP諸先輩。GAPに再入会をお認め下さいましてありがとうございます。先生の力強い励ましの御返事をいただき、また新刊のUFOコンタクティーも送付され、日々新たな気持です。お喜びです。

先生の出版社時代、私は一時熱心なアダムスキーファンであったのですが、いつの頃から宗教を連想しており、気が付いた時は大変な事態におちいつておりました。真に「生命の科学」各所で指摘のとおり、神秘心（靈）の過失をくり返し、その見本が私でありまして、ついに肉体の異変を生じ、昏迷の徒になりかけている自分を発見しました。約六年間、今日もそんな状態が続いているので

すが、おそらく世間には私のように宗教にかぶれ、ついには迷路に深く入り、人知れず後遺症で苦しんでいる人々が多くなるのではないかと思っています。

アダムスキー著・久保田先生訳の一連の宇宙哲学（昭和五十一年）、「宇宙からの訪問者」テレバシー「生命の科学」等、当時購入しては片づけから知人に配つていた自分が、いつしか大きな過失をくり返していたことは、ただあきれるばかりです。霊能者の片腕とおだてられて有頂天ですごした日々と、分裂後に生じた肉体異変に對し……、しかし私は暗黙の内にアダムスキーの本を手にしていました。

一方で宗教関連の思想が私を引きずり込もうとしますが、自分の体験を通して懐疑的であったことで徹底的に音楽を導入し、ピアノの独学も始め、不安、憎しみ、分裂感を起こすと即ベーターペンやシヨパンの旋律に頭を切り替えて、不快感を排する努力をしてきました。気がつくとも市原の自宅と千代田区神田の会社近くの往復の通勤時間はこんなくり返しと「生命の科学」テレバシー「宇宙哲学」のむさぼり読みの日常です（編者注）筆者は大手広告会社社長の御留用で同社専務）。

そこで疾病と借じていた肉体の異変の意味が理解できたのです。ある時など全身から黄色の暗い霧が大盤に抜け出たことがあります。あるすばらしく晴れた秋に磐梯山に行った時、山頂に巨大な黄金の雲がかかっているものと同じです。この様なことを書きますとGAPの趣旨に反す

る事柄かと思われまますので、真に慎重にこういつた現象に對処してゆく決心でございます。自分が神秘を生み出した原因でもあるからです。私はよほどのセンスマインドの強烈な代表者だと苦笑するものです。

書店は相も変わらず神秘ブームで沸くごとく、神秘書が出回り、人々は引きずられてゆきます。でもアダムスキー全集の存在はなんと心強いことでしょうか。私も地道に一步一步、地歩を固めて必ず偉大な人生を築きあげる決心です。

自己の不調和な肉体现象のためにGAPの会合に出席しては申し訳ないと思っておりましたが、このところ、すばらしい希望というのでしようか、幼い頃知っていた新鮮なみずみずしい崇高な、内から湧き出る喜びをよりやく感じることもあり、どうしても進歩されたGAP諸兄、活躍されている皆様に一目お会いしたく、四月より東京月例会に参加させていただきます。

交流が大切

沖縄県那覇市 石野創太

昨年の総会で月の重力が地球の十分の七だと聞いて大変驚くと同時に、また非常に嬉しく思いました。やはり地球とほとんど同じだったという喜びと具体的な数値が与えられたという喜びです。私自身が最近惑星の重力を電磁気学的あるいは流体力学的に解くことにとりつかれて、色々理論を考えてきたためもあります。最近感じるところでは、レンツの法則などからみて、どうも磁場の慣性をもつだろう、だから（惑星の）磁場が回転するには求心力が必要だ

から、それがローレンツ力と呼ばれる力（磁場の慣性力）とつり合っているのだろう、そして物質というものを考えるとき、もしこの物質の慣性が磁場の慣性より小さいか、あるいは物質の自転速度が磁場の自転速度より速いとすれば、その差の分だけ物質は下方へ（中心向きに）重力というものを受けるだろう、などと考えているのです。そして去年は主に電磁気学について、今年はずいに流体力学（特に渦の概念）について考えています。そして電磁気学的な諸発見と流体力学的な考えとをある程度統一できて喜んでみます。どうも自分の書きたいことばかり書いてしまつて申し訳ありません。

ついなが最近筑大宇宙研で発表した流体力学的な重力理論を同封しましたのでお読み下さい。流体力学的なアイデアはアダムスキーの「金星旅行記」の中の「海洋中の渦巻きの中心たる引力が……」というところから、また電磁気学的なアイデアは「UFO問題の真相」第3章の、「惑星の引力はその自転速度の遠心力と静電場の求心力とのあいだの自然のバランスなのである……」というところからなされた。こうして資料・著書類を翻訳し紹介して下さった先生に對してあらためてお礼を申し上げます。まだ私の理論が完璧なものとも、それどころか的を得ているときさえ思いませんが、それでもここにお書きしたのは、お互いに何をしているか知らせ合うのは良いことだし、特にお互いに相手に感謝していることを知らせ合うのは良いことだと考えるためです。こればかりともっと頑張りますので末永くよ

ろしくお願い申し上げます。

素晴らしい静岡支部大会

三重県 松口幸之助

静岡支部の方々や大会に出席された皆様、いかがおすごしでしょうか。

このたびは素晴らしい中伊豆の環境の中で行われた静岡支部大会が大成功裡に終了しましたことを心からお祝い申し上げます。先生の講演も大変に意義深いものがあったと思います。万人に対しての目につくかぎり無条件に祝福する。また祝福想念の放射体として想念波動の周波数を高める。とかく人間は他人に對していつも接触し、色々の想念が湧き起り、非難する場合がときとしてあると思います。祝福想念を送ることによって他人は自分自身であり、これを実行すればいつかは世の中が変わると思います。

静岡支部大会で感動

広島市 佐々木朋子

先日の静岡支部大会では大変素晴らしいお話を聴かせいただき、誠にありがとうございました。今回はアダムスキー全集の刊行完成記念祝賀会ということで、ぜひ先生にお祝いを申し上げたくて出席しました。ご講演の内容も、原点到るらうというとてもふさわしい素晴らしいもので感激いたしました。むかし初めてアダムスキーの体験記類を読み、感激の涙を流したことを思い出し、あのときの純粋な気持ちをいつまでも大切に、これからもGAP活動をやっていきたいと思っております。どうぞこれからもよろしくお願い致します。(編者注)双生児の妹の智子さんも同じような文面の書簡をよこされた。筆跡も酷似しており、不思議な感じがする。

祝アダムスキー全集刊行

愛媛県 伊藤運夫

先日はアダムスキー全集の完結を心からお喜び申し上げます。この業績はスペース・プログラムに対する一大金字塔であります。本当におめでとうございます。いずれ将来において宇宙空間の真実を知りたいという気運が高まったときに、先生が訳されたこの全集の存在を知って大いなる感謝の声があがると思われま

新鮮さに満ちたアダムスキー全集

東京 森島洋至

五月の月例会では先生は少しカゼをひいていらつしたように見えましたが、どうかお体を大切に。これからもどんどん私たちを引っ張っ

して下さい。アダムスキー全集もやると買ひそろえ、少しづつですが読ませていただいております。その内容は大変すばらしく、私はこの本をはじめ読んで読んだのではないかと、びびくりしています。特に、「生命の科学」を読んでいると、久保田先生が一つ一つに注意を払っているのだなあと感激しています。こんなすばらしい本を私たちが読むことができるのはアダムスキーや久保田先生のおかげです。ありがとうございます。なにしろ私たちはちようどアダムスキーが転生した年に生まれたのですが、それが今十九年たっても新しさを満ちているのです。なんとすばらしいことなのでしょう。か。たとえGAP活動はみんなに認められなくても、創造主は知っているのだと思うとすこく勇気がわいてきます。

輪読会を開催

新潟県 星 富治夫

こちら新潟支部の近況を報告したいと思っております。傾向として、GAP会員の人でアダムスキー氏の哲学書はよく読むけれども、A氏の体験記は「一度読んでそれっきり」という人も多いのではないのでしょうか。そこで先日の方支部月例会ではA氏の体験記の改訂版が刊行されたのをきっかけに輪読会を試みました。この輪読会というのは、少し補足しますと、「宇宙からの訪問者」第一部と第二部合わせて十八の章がありますので、それを分担し、ひとりひとり受けもつた部分のあらすじをまとめてきて、月例会でわかりやすく出席者に説明するという内容で

おめでた

千葉県船橋市高根台一―一―四〇三にお住まいの会員、山口緑氏は去る六月十七日、勤務先小学校の同僚・岩崎みどりさんとめでたく結婚された。心から祝福いたします次第。

す。あらすじをまとめるには、(1)体験記を再度読みかえす必要がある。(2)ストーリーをまとめるには場面や出来事の前後関係を秩序だてて順序だてて把握する必要がある。(3)文章化するときはムダなコトバを省いて簡潔な表現を用いる必要がある。これら一連の作業を行うことによつて忘れかけていた記憶を新たなものにし、あるいは以前読んだとき気づかなかつたことを発見する、というように内容の理解を深めることが目的です。また、この輪読会は出席者ひとりひとりが「話し手」と「聞き手」の両者の立場を体験できるといふメリットもあります。一月の月例会では次の三つの文獻について、引き続き輪読会を試みる予定です。「金鼠旅行記」「土鼠旅行記」「金鼠人」とは」

次に一七四四年版のユニバース出版社刊「宇宙からの訪問者」と、今度の文久書林版の改訂された「宇宙からの訪問者」を読みくらべてみた結果、気づいたことを書いてみたいと思っております。(1)訳者である久保田先生が原著者の意図をよく汲みとり、それが改訂版の訳文に反映されている様子がわかる。必要とあれば、旧版にはない記述が加筆されており、内容の理解を助けている。その他。

UFO写真展

松山丸三書店 松山支店

松山支部はアダムスキー全集の完結を記念して、アダムスキー氏とスペース・ピープルの偉大な業績を称える写真展を開催することになりました。この企画は宇宙空間の真実を広く一般人に知らせるために立案されたもので、このたび松山丸三書店の営業部長・向井治雄氏の絶大な御協力のおかげで実現の運びとなりました。向井氏に心から感謝申し上げる次第です。会場ではアダムスキー氏ゆかりの写真多数をパネル展示すると共に、書籍コーナーではアダムスキー全集と本誌の展示・販売も同時に行います。入場者にはアダムスキー氏の事績を紹介したパンフレットの無料配布も行います。期間中は書店側の御厚意で店内放送を通して来店者に入場を呼びかけるほか、定期的に発行している得意先向けの「書店だより」(郵送)に予告を載せるなどPRに努めて下さることになっています。この方法により松山市内外の有識者の間にアダムスキー氏と全集の存在が確実に知れわたることになります。この計画がGAPの「知らせる運動」の一環として行われ、スペース・プログラムに協力することを確信するものです。(伊藤達夫)



1982年 東京本部月例研究会講義録

だれにもわかる「生命の科学」1982年版

(解説者：久保田八郎 発行者：安藤澄雄)

宇宙時代のバイブルとも言える「生命の科学」を訳者自ら解説したこの講義録は、GAP会員をはじめ、宇宙の法則を学ぶ者にとって最良のガイドブックとなるでしょう。

- 第1部：第1～3課(残部僅少)… 700円
- 第2部：第4～6課…………… 500円
- 第3部：第7～9課…………… 500円
- 第4部：第10～12課・解説者特別寄稿文…………… 500円

(B6版 活字タイプオフセット印刷)

送料 どれでも 1冊 170円 2～3冊 200円 4冊 250円

※全巻もしくは第4部をお申し込みの方には、全巻を収納できるブックケースを進呈します(無料)。

〈日本GAP企画第6回海外研修旅行〉

第2次「エルサレム宇宙考古学の旅」

参加申込者 (7月6日現在中間報告)

今夏8月10日より10日間実施予定のツアーは7月6日現在で下記のとおり申込がありました。まだ間に合いますから考慮中の方は至急お申込下さい。

(申込順)

- | | |
|---------------|-----------------|
| 1. 安藤澄雄 仙台市 | 14. 中根 豊 青森県 |
| 2. (妻) 博子 仙台市 | 15. (妻) 久美子 青森県 |
| 3. 矢野紀子 千葉県 | 16. 渡辺克明 栃木県 |
| 4. 安達孝一 山形県 | 17. 佐藤忠義 東京都 |
| 5. 宮城 裕 沖縄県 | 18. 佐藤和枝 千葉県 |
| 6. 大橋利昌 岐阜県 | 19. 萩原昭彦 長野県 |
| 7. 山崎清美 栃木県 | 20. 高橋和美 埼玉県 |
| 8. 柴田光明 山形県 | 21. 今西行雄 神戸市 |
| 9. (妻) 文子 山形県 | 22. (姉) 正子 神戸市 |
| 10. 橋本由紀子 東京都 | 23. 佐々木智子 広島市 |
| 11. 大場静子 東京都 | 24. 小川照廣 岡山県 |
| 12. 菊地啓子 宇都宮市 | 25. 石田義雄 神奈川県 |
| 13. 平野祥子 東京都 | 26. 嶋崎 修 茨城県 |

第6回 静岡支部大会と
**アダムスキー全集刊行記念祝賀会

●四月二十九日(日)

●東京につかつニューライフホテル
(静岡県中伊豆町)

●出席者 七十四名

樹々の新緑が目美しく映える四月二十九日、中伊豆の山中の大京につかつニューライフホテルで静岡支部大会は開催された。北は北海道、南は九州と全国から熱心な方々多数のご参加をいただき、会場内も周囲の環境と同様、調和し素晴らしいフーリングのなかで地元中伊豆の高梨氏の司会で大会は始まった。

全員が待ちに待った久保田先生の大講演「アダムスキー問題と宇宙哲学の實踐法」は私達の眠っていた魂を振り起こさせてくれた感動的な迫力ある講演だった。休憩のあとは、「エルサレム宇宙考古学の旅」の記録映画上映(撮影大阪支部会員斎藤康美氏)で、支部から参加したメンバーも昨年の感激を新たにしていた。記念撮影のあと質疑応答が行われ、久保田先生から有益な答をいただき盛況のうち大会は終了した。

夕方は、アダムスキー氏の業績と久保田先生の業績、そして文久番林さんのご協力を称え、アダムスキー全集刊行完成祝賀会が東京本部の方々の協力をえて開催された。会場にはアダムスキー全集全七巻と、アダムスキー氏、オーソン氏、久保田先生の額入の写真が飾られ、また貴重なアダムスキー氏のサイン入りの書

簡が特別に展示され、参加者も大喜びだった。席上、東京本部有志の方々や静岡支部より久保田先生、文久番林さん、そして先生の助手として大活躍されている松村氏にそれぞれ記念品が贈呈された。世界に例のないアダムスキー全集の刊行に参加者全員で祝福し、夜遅くまで楽しい祝賀パーティーは続いた。

翌日は伊豆半島を大型観光バスで周遊し、山あり滝あり海ありと素晴らしい伊豆の風景を心ゆくまで皆さんと共に楽しんだ。

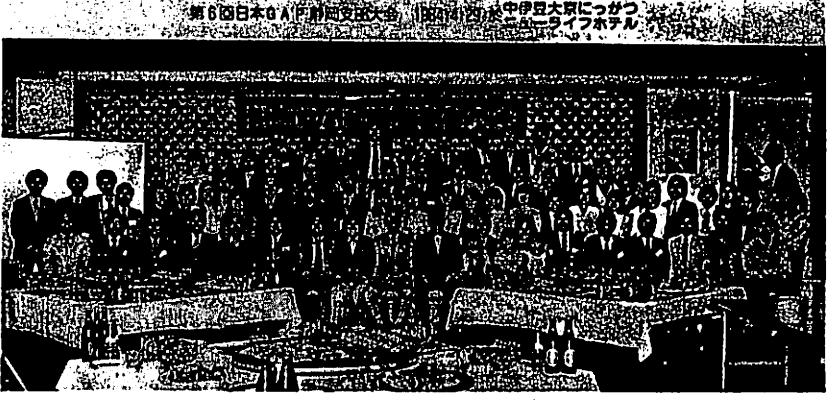
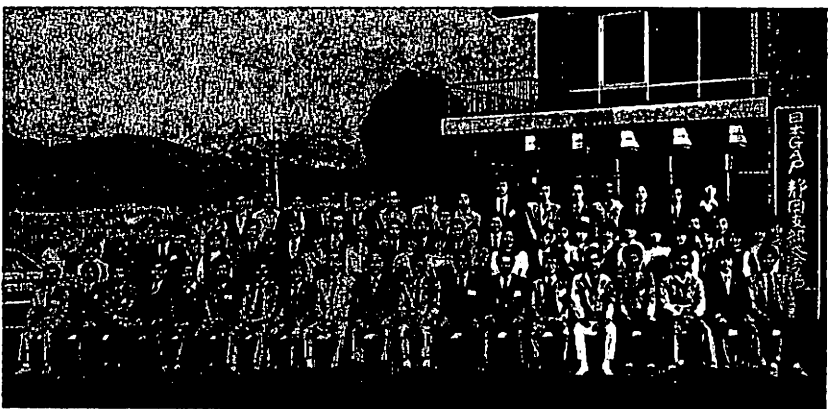
今回アダムスキー全集が完成し、その記念すべき大会が静岡県中伊豆で開催されたことは大変意義深いものがあると思われまます。この全集の完成によりGAP活動は新たな展開をしてゆくでしょう。そして今回参加された方々も久保田先生の講演により大変勇気付けられましたので、それぞれ地元で活発に知らせる運動を推進させてゆくことでしよう。

今回も大変お世話になった久保田先生を始め文久番林さん、そして東京本部の方々に厚く御礼を申し上げます。

なお大会が終わって星のきれいな五月二日の夜、大会の成功を感謝して上空に送念しました。すると六機から八機のオレンジの光体の編隊飛行がありました。まるで空中をすべるような飛行で、「アダムスキー全集刊行完成おめでとう!」大会、祝賀会、二次会、バスツアーとすべ

て見てましたよ。講演された久保田先生を始め参加された皆さんによりしくお伝

え下さい」と言っているかのようでした。
(野口敏治)





●六月十日(日)

●太田社会教育総合センター(太田市)

●出席者 二十六名

小雨にけむる上州太田の緑濃い群馬支部大会へ宇宙的印象をたずさえて各地より会員の方々がお集まり下さいました。宇宙の友情と、共に向上しようとする真剣さと調和ある一体感は、久保田先生のご講演によりいっそう高まり地元会員一同言葉少なに数多い宇宙的梦想を感受させていただきました。

大会は小川隆氏の緊張感の中にも落ち着いた雰囲気の中で始められ、久保田先生の「GAP活動の意義」と題するご講演によって真に価値あるひとときが展開され、私達一人一人の日常生活における人間関係そして将来においてのGAP活動の本来の意味を実に具体的に説いて下さいました。

人生は他人との戦いではなく自分の内部との戦いであること。そして自分の運命の変遷や人生の軌路の別れ際というものは、一切自分の想念によって決まってしまうこと、このため強力な信念と強力なイメージを描くことが大切。また原子(水)の配列等は英知(神)の働きで、ミクロの世界を考えればすべて万物は一体であり分離したものはない。自分のまわりのものすべてが同じ原子から出来ており意識的に一体感を持たなくてはならない。そして自分自身をテレパシーの開発により鋭敏な生き者にするのが急務

であることや、一個人とその周辺すべてに祝福の想念を持つこと等、こまかくご指導して下さいました。

大会後夕食会は太田グリーンホテル2階に移り、地元会員座間登氏の製作による大会看板も移した中で、歓談に花が咲いたがアトラクションがなかったのが残念！しかし出席者の多くの人々の高次の想念が広がったよかったですか、ホテル側の支配人はじめ数名の人々が、宿泊者や出席者に興味を示していました。

翌日は雨上がりの日光東照宮、中禅寺湖へ観光を行った。先生はじめ遠来の皆様、そして地元会員の協力ご支援に深謝致します。(久保寺信一)



●六月二十四日(日)

●仙台市市民会館(仙台市)

●出席者 三十名

前日までの梅雨空が嘘のように快晴となった。市民会館へ向かう途中、タクシ一の運転手さんに「今の節にこんな天気は珍しいね」と話しかけられ、思わず微笑がこみあげた。

久保田先生は当日十一時五十九分着の新幹線で、静岡の野口敏治氏と共に来仙された。仙台の好天を見て先生は、「私が行く所、円盤が雲を吹き払ってくれるのかな」と微笑まれた。そしてこの日の夕刻、それを裏付けるような石田義雄氏の母船目撃があった。

大会二週間前まで、支部会員以外の参加申込みがほとんどなしという状態で、さすがに不安がよぎった。しかし、そんなある日の真夜中、一人で大会の運びを考えていたら、急に、「一人ではない。自分分は一人ではない」という強烈な印象が湧いた。以後は意識にゆだねきつた心境で過ごせた。

大会では、太田節子さん(仙台支部)の「暮らしの中のアダムスキー哲学」という興味深い講演があった。そして、いよいよ久保田先生のご登壇である。「現象の世界と宇宙空間」という講演に、大会の雰囲気は最高潮となった。万物一体感の重要性を説かれ、これがあらゆる実践の基礎であると強調された。

夕食会では、十日ばかり早い久保田先生の「誕生祝い」が催された。実は先生に内証にしていたもので、日頃の先生のご尽力に感謝の念を込めて両支部で企画したものである。

翌日は、あいにく曇天だったが、ゆったりした松島観光を楽しんだ。久保田先生はじめ、出席された皆様、スペース・ビープルに衷心より感謝の意を表します。

私としては今回ほど勉強させられたことはなく、またスペース・ビープルを身近に感じた点でも以前の大会とはひと味違うものであった。(笠原弘可)





●六月十七日(日)
●那霸市民会館(那霸市)
●出席者 十名

五月に開催を予定していた沖縄支部大会は久保田先生をはじめ全国の会員の皆様との交流と親睦を深めるのに絶好の機会だったが、残念ながら中止になった。しかし先生から単独来沖の件を伝えられたときは驚き胸にジンとくるものがあった。早速支部会員一同で会場の選定その他の準備に入った。都合により十帖ばかりの狭い部屋しかとれなかったが、かえって親密さをましてよかつたと思う。

先生の御講演は三千五百年前にさかのぼるスペース・プログラムに始まり、アダムスキー哲学のメインに入られた。その中心になるものは万物一体のフーリングを極端にまで高めよということだ。先生はそれを元素、原子、素粒子の世界へと掘り下げて話し、粒子の結合に関与している「何物か」に思いを馳せて、その不可思議さと神秘を感じとるフーリングを起せよという。そしてこれこそ宇宙の英知である。

ミクロの世界には善も悪もなく、ただ自然の法則があるのみで、人間もこの法則に従った生き方をして、万物との一体感のもとに調和すべきである。アダムスキー哲学の実践には①強烈な信念、②望ましい物事のイメージを描く、③万物一体感、④万物にたいする祝福、の四つが重要である。これを実践すれば恐怖心も

消滅するし、いかなる宗教に頼る必要もない。以上が先生の御講演の大意であつたと思う。

先生がいらっしゃると、ここ沖縄は特別に曇くなるような気がする。今回もフウフウ音いながら熱い思いで素晴らしい三日間をすごさせて頂いた。宇宙の意識であるお父さん、ありがとうございます。スペース・ビープルの方々、ありがとうございました。(新里義雄)

まったく素晴らしい三日間だった。気軽な気持ちで行つたのに沖縄支部の皆さんのご懇篤なご接待にあずかり、礼を重んじた琉球の尚王家の伝統が残っているような気がして恐縮の連続であつた。

五月に予定されていた第二回沖縄支部大会が中止されたため、激励の意味で渾身の力をこめてお話しし、特に万物一体感の高揚と、テレパシー開発には自分も大切にすると同じように万物を大切にすることの重要性を力説。少人数ながら皆さんは真剣そのものであつた。

月例会終了後はワインハウス葡萄酒における夕食会にご招待を頂き、談話風発大いに旧交をあためる。飛行船という劇団に所属する東京の会員・橋本弘美嬢が折から沖縄公演の合間をみて出席し、一段とにぎやかになる。

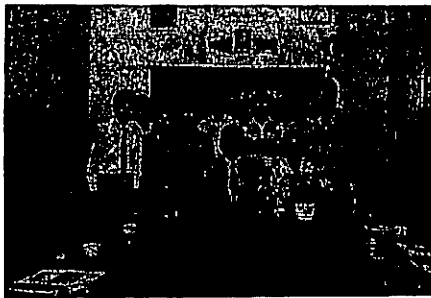
夕食会後は十一時より上原正吉民謡クラブへ行き、久方ぶりに独特な旋律の牧歌的な沖縄民謡に陶醉。ある程度は観光客向けにアレンジしてあるが、それでも男女七名オンパレードによる名高い琉球民謡(谷茶煎)などは圧倒的なエグゾティ

シズム(異国情緒)に満ちた演奏であつた。カステネットに似た四つ竹の軽快な音が流れるこの陽気な曲は大勢で歌うほうがよい。世界の民族音楽を愛好する私にとつて、琉球音楽はメキシコのそれに次ぐエグゾティックなものである。

十八日は二台の車に七名が分乗して沖縄本島一周のドライブに出た。那覇を出発してまず西側海岸線を北上、北端の辺戸岬で与論島を望見。ここから東側海岸線へまわつてゴザに着いたのは夜十時を過ぎていた。本島はかなり細長い島だ。南部戦跡は一昨年見学したので今回は省略する。メキシコの田舎に酷似した風景をよく見かけた。いったいに沖縄の開放性は時間の束縛をきらうメキシコの風土と共通したものがあつた。亜熱帯特有の魅力はたたえている。出会う人々はみな親切だが方言はまるで外国語。

コザで夕食後、一昨年GAPの団体旅行で訪れた民謡クラブ「二見情話」はすでに消滅していたため、近くの「ウミナイビ」へ入る。これは王女さまという意味のこと。ここでも沖縄民謡の醍醐味を満喫し、そのあと那覇へ帰り、「シェールブル」というバーで仲江繁氏というギタリストの素晴らしい演奏を聴く。沖縄にこんな芸術家がいとは。

十九日は首里城跡を見学後、知念半島へ行き、グラスポートで海底の珊瑚礁に歓びをあげる。灼熱の太陽、息をのむような蒼穹とエメラルドグリーンの海、借られぬほど清澄な磯の水などは、情熱的で純粹にして高次な沖縄支部の方々の象徴である。お世話になった支部代表・新里義雄氏その他の方々に九拝の感謝をささげたい。(久保田八郎)



〈予告〉 59年度地方支部大会 —その3—

	第4回 札幌旭川合同支部大会	第2回 福岡支部大会
日時	9月9日(日) 午後 1:00→5:00	10月28日(日) 午後 1:00→5:00
会場と交通	「北海道教育文化会館」 札幌市中央区北1条西13丁目 ☎ 011-271-5821 地下鉄東西線「西11丁目駅」下車、 1番出口徒歩5分。	「福岡市民会館」2F会議室。 福岡市中央区天神5丁目1-23、 ☎ 092-761-6567 国鉄「博多駅」からバスか地下鉄に て天神下車。北へ50m、天神ダイエ ーショップバズを抜けて須崎公園の 中へ。県文化会館の向かい側。 天神より徒歩10分。
会費	¥2000 (希望者のみ全員記念写真代 ¥800 を別納。ランドキャピネ判 ・送料共)	左に同じ。
プログラム	司会 高野昌司 1:00 支部代表挨拶 (伊藤重信・阿部 堯) 1:10 講演「宇宙哲学とアダムス キー問題の未来」 (日本GAP会長・久保田 八郎先生) 2:30 休憩(10分) 2:40 (予定)スライド映写 「第2次エルサレム宇宙考 古学の旅」 3:40 休憩・記念撮影 4:00 全員自己紹介・質疑 5:30 閉会	司会 喜多正宜 1:00 支部代表挨拶 (島津紳二郎) 1:10 会員講演(題 未定) (吉岡裕人) 1:35 講演「日本GAPの将来」 2:40 休憩・記念撮影 3:00 全員自己紹介・質疑 5:00 閉会
夕食会	大会終了後 6:00から8:00まで立 食形式により「厚生年金会館」で夕 食会を開催。 食費 ¥5000	大会終了後 6:00から8:00まで 「平和楼」4Fで開催。場所は天神 2丁目6-42。 ☎ 092-741-4141 会費 ¥4500
宿舎	「厚生年金会館」をお世話します。 大会会場「北海道教育文化会館」の 斜めうしろ。 シングル1泊 ¥4400(税サ込) ツイン ¥7700	「グリーンホテル」をお世話します。 博多駅裏側の「筑紫口」を出て左へ スグ。徒歩2分。 シングル1泊 ¥4800 ツイン ¥6900
申込	夕食会、宿舎、観光の申込はハガキ で8月20日までに下記へお申込下 さい。 〒062 札幌市豊平区美園3条1丁目 2-23、高野昌司 ☎ 011-822-8260	夕食会、宿舎、観光の申込はハガキ で10月中旬頃までに下記へお申込 下さい。 〒813 福岡市東区香椎駅前1-19- 28、大村ビル405、 島津紳二郎 ☎ 092-672-6784
観光	大会翌日は江別市野幌(のっぽろ) の森林公園を散策。札幌より地下鉄 で行きます。費用は¥2000	大会翌日は博多港より玄海国定公園 遊覧船で志賀島の金印公園、玄海島 を周遊します。多数ご参加下さい。 15:30頃博多駅で解散。
備考	9月は大会のため両支部とも月例 は中止。	10月の月例会は大会のため中止。

〈予告〉

59年度 日本GAP総会

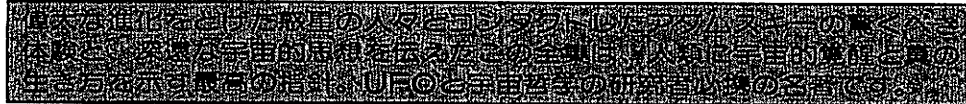
本年も9月23日(日曜日・2日連休の初日)に皇居北の丸公園の科学技術館で盛大に開催しますが、プログラム等細目が未定のために、来たる8月下旬に詳細な案内状を全国会員に発送しますから、多数ご来場のほどをお待ちいたしております。大会の翌日は東京ディズニーランドを団体で見学の予定です。お子さまづれの方歓迎。



ジョージ・アダムスキー全集

B6判・本文上質紙・厚手表紙箱入豪華本

久保田八郎訳 全7巻
徹底的全面改訳決定版



1. 宇宙からの訪問者

338頁 ¥2500

ジョージ・アダムスキーのあまりにも有名な体験記。1952年11月20日に米カリフォルニア州の砂漠で星人と会見した体験「空飛ぶ円盤は着陸した」を本書の第1部とし、円盤や母船に乗り、多数の異星人と会見した実録を第2部とした驚異的な書物。本全集の中心をなす最重要なもの。

2. UFO問題の真相

262頁 ¥2500

第1巻の補足的なUFOと異星人問題の真相を詳述。特に円盤の推進理論や、聖書とUFOとの関係を述べた箇所は重要である。第2部はアダムスキーの世界講演旅行記。各国のGAPグループの活動と反応や、サイレンス・グループの卑劣な妨害が克明に描写されている。

3. UFOとアダムスキー

350頁 ¥2500

アダムスキーが実際に体験した母船による宇宙旅行を詳細に述べた「金星旅行記」と「土星旅行記」から成る本書第1部「死と空間を超えて」が圧巻。またアダムスキーが存命中に日本GAP会長・久保田八郎に送り続けたばう大な情報と書類類を収録して第2部とした。

4. 宇宙哲学

148頁 ¥1300

人間のセンス・マインド(肉体の心)と宇宙の意識との一体化を中心思想として、人間を進化させる方法を明快に理路整然と説く。この哲学は、人間の意識と物質との関係の解明と応用とをめざす21世紀の科学の最先端をゆくもので、アダムスキーの哲学関係三者作の中心となるもの。

5. テレパシー開発法

190頁 ¥1800

人間に内在する宇宙的な能力のうち、テレパシー能力の開発法を説明したものの。特に目・耳・鼻・口の4官をコントロールして、内部の意識から来るテレパシクな印象を受取る方法を詳しく解説し、他人と無言の会話をを行う技術と述べた、類書のないガイドブック。

6. 生命の科学

205頁 ¥1800

アダムスキーが他界する数年前に出したScience of Lifeと題する12分冊の講義を和訳して一書にまとめたもの。アダムスキーの宇宙的哲学の礎とめとなる一大金字塔で、真実のテレパシーと心霊的な霊界通信の相違を明確にし、心霊現象への接近を警告する画期的な書。

7. アダムスキー論説集

370頁 ¥2500

日本GAP機関誌に掲載されたのみで、単行本化されていなかったアダムスキーの論説や講演録等を網羅編さんしたもの。特に死去する直前の最後の講演が圧巻。第2部にはアダムスキー研究者として名高い久保田八郎が数度渡米してアダムスキーの高弟たちとインタビューした記事を収録。アダムスキーの偉大な面が描写されている。

※送料は各巻¥250。但し発行所宛直接注文の場合に限り、下記のように定価・送料をサービス。

- ☆1冊注文=送料は出版社負担。書籍代のみご送金下さい。
- ☆第1巻より第3巻まで一括注文=特別セット価格 ¥7000(送料共)
- ☆第4巻より第7巻まで一括注文=特別セット価格 ¥6500(送料共)
- ☆第1巻より第7巻まで一括注文=全巻セット価格 ¥13000(送料共)

郵便振替または現金書留で
ご注文下さい。

文久書林 〒162 東京都新宿区榎町33 Tel. 03(267)6920 振替 東京4-2521

日本GAP企画第6回海外研修旅行
第2次「エルサレム宇宙考古学の旅」

圧倒的な感動と歓喜の旅であった58年度の「エルサレム宇宙考古学の旅」の素晴らしさを再度満喫して頂くために、多数の方の要望にこたえて59年8月に第2次のイスラエル行きを企画しました。エルサレムを中心にイエス関係の遺跡を訪ねながら第1次の旅と大体同じコースをたどり、そのあとはスイスへ入国してルツェルン経由インターレークンを経てさらに登山電車で美しいグリーンデルヴァルト村へ登り、ここに宿泊して夢のようなスイスアルプスを望見します。帰途はルツェルンに宿泊しますので、スイス滞在は2泊3日となります。またオプション(希望者だけ)により登山電車で名峰ユングフラウにも登って大自然の美を觀賞します。航空機はチューリッヒ経由のスイス航空ジャンボを利用。費用は¥498,000。(ただしユングフラウ登山は別途料金約¥10,000)。詳細は別紙案内書をごらん下さい。ハガキで下記へお申し込み下さい。



▲写真は58年8月の「エルサレム宇宙考古学の旅」

●案内書申込
ワールドセブトラベル株式会社 田中 正
〒150 東京都渋谷区東3-24-9、サンイーストビル2F
Tel. (03)499-2461 夜間・休祭日は(0462)63-0615

正 個人団体を問わず国内外の旅行手配・航空券購入
その他の予約は当方におまかせください。GAPの
会員の方には安い費用でお世話いたします。

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日 時	会 場	会 費	携 行 品 ・ 行 事
東京本部	毎月第1土曜日 午後2:00→6:30 ※8月のみ皇居北の丸公園内、科学技術館8F会議室	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。 ☎03-828-2111。国電「上野駅」の「公園口」下車。改札口の真向かいスグ。 連絡先＝日本GAP ☎03-651-0958	¥300	2:00→3:00会員による体験講演。 3:00→4:30久保田会長の「宇宙からの訪問者」講義と近況報告、テレパシー練習、休憩。 4:30→6:30自己紹介、意見発表、質疑応答。
大阪支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」☎(388)7351。 国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。連絡先＝平塚和義 ☎06-436-3478	¥200	テキストとして「宇宙からの訪問者」(文久書林刊)を持参。東京例会における久保田会長の講演テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
新潟支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00 ※7月は支部大会なるも月例会は開催します。	新潟駅前「青年の家」☎0252-44-6766 連絡先＝風富治夫 ☎02579-2-5562	¥200	テキストとして「宇宙からの訪問者」持参。東京本部例会における久保田会長の宇宙哲学講義録音テープを公開。テレパシー練習、座談会。
福岡支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	福岡市天神町5丁目1-23「福岡市民会館」3F 国際会議控室 連絡先＝島津紳二郎 ☎092-672-6784	¥300	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。久保田会長の東京例会における「宇宙哲学」講義録音テープ公開。座談と研究発表。テレパシー練習。
名古屋支部	毎月第2日曜日 午後1:00→4:30	名古屋市中区古沢町7-1「名古屋市民会館」特別会議室。☎(052)331-2141 国鉄・名鉄・地下鉄「金山橋駅」下車。徒歩5分。 連絡先＝林 国宜 ☎0586-46-6468	¥300	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。久保田会長の講演録音テープ公開。研究発表・テレパシー練習、座談会。
仙台支部	毎月第4日曜日 午後1:10→4:20	仙台市「市民会館」会議室(西公園内) 連絡先＝笠原弘可 ☎0222-95-0725	¥200	東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開、テレパシー練習、座談会。
山形支部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00	山形市小白川町「社会福祉センター」 山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩3分。☎0236-42-5181 連絡先＝清水 正 ☎0238-37-5635	¥200	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習、研究発表、座談会。
札幌支部	毎月第1日曜日 午後1:00→4:30	中央区北一条西一丁目「札幌市民会館」会議室 ☎011-241-9171 連絡先＝高野昌司 ☎011-822-8260	¥500	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。久保田会長の講演録音テープを公開。テレパシー練習、座談会。
静岡支部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00	静岡市駿府町「静岡県婦人会館」会議室 ☎0542-54-5215 連絡先＝野口敏治 ☎0542-86-7729	¥200	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京本部例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習、研究発表。
旭川支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00	旭川市6条通4丁目「勤労者福祉会館」2F小会議室 ☎0166-26-1304 連絡先＝阿部 晃 ☎01658-2-1585	¥500	東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。研究発表、アダムスキー著「宇宙からの訪問者」「生命の科学」を持参。質疑応答、テレパシー練習、研究発表。
松山支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00 ※奇数月は広島市広島駅ビル内「ステーションホテル」5F会議室。 ※偶数月は松山市民会館会議室。	松山市民会館会議室 連絡先＝伊藤達夫 ☎0898-22-3060	¥200	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。質疑応答、座談会。
群馬支部	毎月第2日曜日 午後2:00→6:00	群馬県太田市「社会教育総合センター」3F。連絡先＝久保守信一 店 ☎0276-25-5958 自宅☎0276-45-3544	¥200	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開、座談会等。
青森支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	青森市松原「青森市民文化センター」教養室(2) ☎0177-34-0163 連絡先＝中根 豊 ☎01756-3-9386	¥300	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。テレパシー練習、研究発表、座談会。
神縄支部	毎月第3日曜日 午後1:00→6:00	〒901-22 宜野湾市野嵩1547 マキシア パート 新里方 連絡先＝新里義雄 ☎09889-3-3695	¥500	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。久保田先生による講演録音解説テープ公開。質疑応答。想念観察とテレパシーの研究報告。自己紹介座談会等。
秋田支部	毎月第2日曜日 午後1:00→5:00	秋田市八幡運動公園1-2「中央公民館」趣味の間。☎0188-24-5377 連絡先＝伊藤正治 ☎0188-62-2831	¥200	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習、座談会。
神奈川支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	神奈川県川崎市川崎区富士見2-5-2 「川崎市立労働会館」第1研修室 ☎044-222-4416。国鉄京浜急行「川崎駅」下車。市バス・有馬線・労働会館前 連絡先＝大崎孝典 ☎0492-65-0389	¥400	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。研究発表、座談会等。
茨城支部	毎月第3日曜日 午後2:00→5:00 ※今年8月は第4日曜日。	水戸市中央1丁目4番1号「水戸市民会館」2F 小会議室(203号室) ☎0292-24-7521 水戸駅より徒歩10分 岡駅南口より徒歩5分。 連絡先＝清水勝一 ☎0292-73-1903	¥300	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習、座談会、研究発表等。

